



KYOTO EXPERIMENT Office
6F 7th Hase Bldg.
229-2 Shoshoi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto
604-0862 JAPAN
Tel +81 75 213 5839 Fax +81 75 213 5849



KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2025 プログラム発表

広報に関するお問合せ先☎ KYOTO EXPERIMENT 事務局（広報担当：前田、江口、加藤、豊山）

Tel: 075-213-5839 Mail: pr@kyoto-ex.jp

※本資料に掲載の画像をご使用希望の場合は上記までご連絡ください。

その他のお問合せ☎ KYOTO EXPERIMENT 事務局

☎ 604-0862 京都市中京区少将井町 229-2 第 7 長谷ビル 6F

Tel: 075-213-5839（平日 11:00-19:00 [7 月までは平日 11:00-17:00、開催期間中は無休]） Fax: 075-213-5849

Mail: info@kyoto-ex.jp Web: kyoto-ex.jp



KYOTO EXPERIMENT とは

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭は、
2010 年より毎年開催している京都発の国際舞台芸術祭です。今年で 16 回目を迎えます。
国内外の「EXPERIMENT（エクスペリメント）＝実験」的な舞台芸術を創造・発信し、
芸術表現と社会を、新しい形の対話でつなぐことを目指しています。
演劇、ダンス、音楽、美術、デザインなどジャンルを横断した実験的な表現が集まり、
そこから生まれる創造、体験、思考を通じて、舞台芸術の新たな可能性をひらいていきます。

※プレスリリースは、ウェブサイトよりダウンロードできます。

<https://kyoto-ex.jp>

※広報用画像が必要な場合は、下記までお問合せください。

KYOTO EXPERIMENT 事務局（広報担当：前田、江口、加藤、豊山）

Tel：075-213-5839（平日 11:00-19:00 [7 月までは平日 11:00-17:00、開催期間中は無休]）

Mail：pr@kyoto-ex.jp

目次

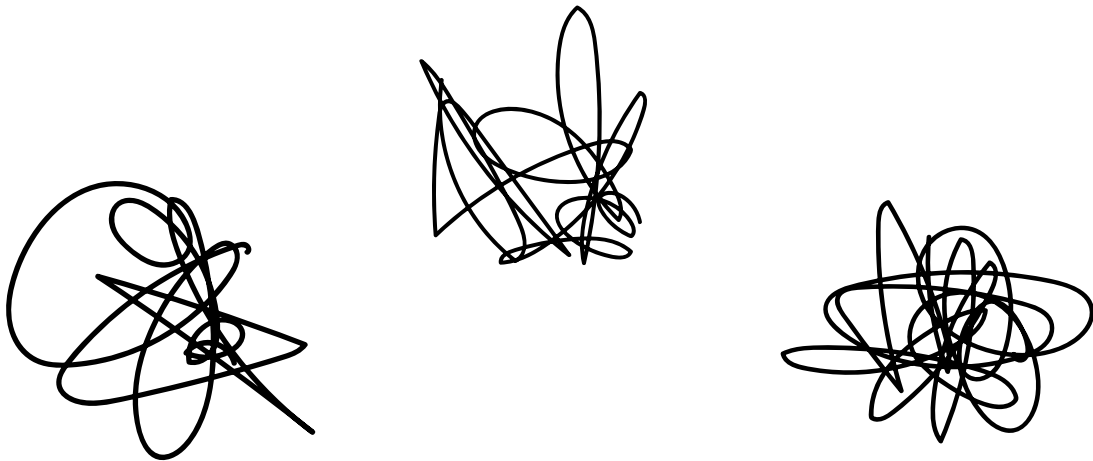
p.5	開催趣旨、概要
p.6	ごあいさつ
p.7-8	ディレクターズ・メッセージ
p.9	フェスティバルを構成する3つのプログラム
p.10	Kansai Studies（リサーチプログラム）
p.11-25	Shows（上演プログラム）
	ターニャ・アル＝フリー & ズィヤード・アブー・リーシュ
	中間アヤカ
	バック・トゥ・バック・シアター
	マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター
	村川拓也
	筒井 潤
	荒木優光
	アダム・キナー & クリストファー・ウィレス
	Punk and Beyond
	倉田 翠 / akakilike
	マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス
	Jang-Chi × 李 銘宸（リー・ミンチェン）× ネス・ロケ × 温 又柔
p.26-31	Echoes Now（ショーケース）
p.32-36	Super Knowledge for the Future [SKF]（エクスチェンジプログラム）
p.37	KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」
p.38	フリンジ「More Experiments」、ミーティングポイント
p.39-40	感想シェアカフェ、ブックフェア、パートナーホテル
p.41-43	関連プログラム、提携プログラム
p.44	会場
p.45-46	チケット情報
p.47	KEX サポーター
p.48-49	スケジュール
p.50-51	開催クレジット

開催趣旨

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2025 は、松尾芭蕉の俳句から引いた「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」をキーワードに、多様な人々と舞台芸術の出会いと対話が可能になるフェスティバルとして開催します。

松茸に松ではない知らない木の葉がくっついている、という意の芭蕉の俳句からは、未知や違和感との出会いと共存のあり方、そして長じて、未知や違和感を覚える領域があるからこそ生まれる出会いがある、という思考を引き出すことができます。見知らぬものの違和感や他者との差異は、ともすれば世界を引き裂く分断の理由となるでしょう。しかし、こうした状況にある現代だからこそ、実験的な舞台芸術を通して違和感やノイズを肯定的に捉え、わたしたちを覆う分断へのささやかな抵抗とすることを、このキーワードを通して提案します。

フェスティバルが根ざす関西地域をアーティストの視点で探究し、未来の創造的な土壌を耕していくためのリサーチプログラム「Kansai Studies」、世界各地の実験的な舞台芸術を紹介する上演プログラム「Shows」、実験的表現とそれが生まれる背景や、いまを考えるトピックを扱うワークショップやトークが体験できるエクスチェンジプログラム「Super Knowledge for the Future [SKF]」の3つのプログラムでフェスティバルを実施します。



概要

会期 2025 年 10 月 4 日（土）－ 10 月 26 日（日）

会場 ロームシアター京都、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、THEATRE E9 KYOTO、
京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA、伊藤記念図書館（京都市立芸術大学附属図書館）、
京都市左京東部いきいき市民活動センター、CLUB METRO ほか

主催 京都国際舞台芸術祭実行委員会

[京都市、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、
京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、
京都芸術大学 舞台芸術研究センター、
THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）、
一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT

📖 ごあいさつ

京都市長ご挨拶

最先端の芸術表現で、京都のまちに多くの衝撃と感動をもたらしてきた舞台芸術の祭典「KYOTO EXPERIMENT」が16回目を迎える本年も、盛大に開催できることを嬉しく思います。

開催に御尽力いただいた山本麻友美実行委員長をはじめ、すべての関係者の皆様に深く敬意と感謝の意を表します。

今年は、松尾芭蕉の句「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」をキーワードにプログラムを展開します。このたった17音の中に込められた無限に広がる世界観は、今なお人々の創造性をかき立てて止みません。

国内外で活躍する新進気鋭のアーティストが、京都の人や文化と交ざり合い共鳴することで、どのようなパフォーマンスが生み出されるのか。その壮大な実験は、私たちが未知なる世界へと誘います。

御来場の皆様は、今ここのだけの偶発的な出会いを心行くまでお楽しみください。多様な人と時間や意見を共有することで、皆様にとってかけがえの無い機会となることを願っています。

京都市といたしましても、文化を基軸としたまちづくりで、多彩な人々が交ざり合い、誰もが個性を生かして活躍できる社会の実現に取り組んでまいります。変わらぬ御支援と御協力をお願いいたします。

京都市長 松井孝治

実行委員長ご挨拶

現代の私たちは、紛争や災害、そして日常にひそむさまざまなストレスを避けるために、「失敗しないこと」や「安心・安全であること」に重きを置き、そこに、ある種の幸福や心身の平穏を見いだしてきました。けれどその一方で、世界は次第に小さく整理され、重箱の隅を突くような息苦しさが生まれているようにも感じます。

この30年間の日本社会の停滞は、「プランニング（計画）、アナリシス（分析）、コンプライアンス（法令順守）の3つの過剰こそ真因」と指摘する記事※を目にしました。いわゆるPDCAサイクルのPlan（計画）とCheck（評価）が肥大化し、Do（実行）とAction（改善）が軽視される構造。こうした社会では、失敗だけではなく、揺らぎや偶然の余地、違和感までもが排除されてしまいます。

KYOTO EXPERIMENTは、そんな時代にあって、そのような正しさや正確さだけにとどまらない未定形の感覚や発想を、舞台芸術というかたちで立ち上げる実験の場です。正解や道筋を示すのではなく、「わからなさ」ととどまりながら、観客とともに感覚を揺さぶり、新たな視点をひらいていきたいと考えています。

今年のキーワードは、「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」。湿度や匂い、土の感触や足元のおぼつかなさ、山の怖さ。未知への興味と不安を同時に喚起する、五感を刺激する松尾芭蕉の句です。このキーワードを聞いた瞬間、子どもの頃、祖母と松茸を採りに行った記憶がよみがえりました。湿った落ち葉の下にひそむ宝物を見つける祖母の手つき。木が生い茂る薄暗い斜面を滑り落ちないように歩く緊張感。記憶と感覚が重なり、世界の輪郭がふいに変わる——そんな瞬間を、たくさんの方と今年も京都で分かち合えたらと思います。

※『「失敗の本質」野中氏の遺産』日本経済新聞（2025年2月1日）中山淳史執筆。
野中郁次郎氏（経営学者）のコメント。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 山本麻友美

☞ ディレクターズ・メッセージ

ディレクターズ・メッセージ

——見えない境界線を超えていくために

2025 年のディレクターズ・メッセージを執筆するにあたり、川崎・塚原でひとつのテキストをつくるよりも、今年のフェスティバルについてそれぞれが考えていることを、往復書簡の形でテキストにすることを提案してみました。ふだん、2 人で会話をしながらフェスティバルのプログラムを考え、いま起きていることについて話し合ったり、運営について頭を悩ませたりしているその片鱗を、観客のみなさまにも共有できればと考えたからです。これが KYOTO EXPERIMENT 2025 の入り口になることを願って、3 日間の往復書簡をここに記します。

KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

川崎陽子 塚原悠也

川崎 6月29日 15:25

KYOTO EXPERIMENT は、今年で 16 回目の開催を数えます。いま、これを書いているのは 6 月最後の日曜日の午後で、暑いけれど天気はよくて、休日らしい穏やかな空気です。でも、この私が過ごしている時間の裏側には、全く違う時間が流れていることが頭から離れません。パレスチナやイランのこと、香港のこと……人々の生活と自由が奪われ、脅かされる世界にいま自分たちは生きているのだということ、KYOTO EXPERIMENT はそういう世界の中で、日本の京都を拠点に行われるフェスティバルだということを忘れてはいけないと思うのです。

とはいえ、私たちは政治家ではないし、KYOTO EXPERIMENT は舞台芸術のフェスティバルです。では、ここで何をすべきか／なされるべきかと考えると、「京都の実験」というフェスティバル名の通り、舞台芸術の実験を思う存分できる表現の自由の場をつくり、キープしていくこと——これが最も重要で、かつ実はいまの日本においては喫緊のことであるように思えてなりません。実験的とは、より断片的で個人的で、大きな物語や大義にくぐられるものごとからは、はみ出したりこぼれ落ちるものだと思います。今年のプログラムには、そうした表現を見出せるものが多いかもしれません。

塚原 6月30日 11:30

幼少のころ遊んでいた友達の父親が中東からの難民で、自分の親が聞いた話ではアメリカに飛行機で到着した際に「自動ドア」の仕組みが分からず、自分はここを通過してもよいのかどうか、ずっと立って人々が通り過ぎるのを見ていたそうです。これを聞いた時は衝撃的でしたが、他者を通じて自分たちの日常をどこまで疑えるのか、自明のものとならずに視野と想像力を広げていくのか、そういったことが人類の行為として無くなることはないのだろうと思います。これは人の家や、友達の部屋に行った時の匂いやごはんをご馳走になったときの記憶とかともつながるかもしれません。でもそういった感性レベルの気づき、というものが芸術表現の基礎ですよね。知らなかったことにどうアプローチできるのか。現代の生活は「知っている」ものに囲まれていると錯覚しがちだけど、ほとんどのことは知らない。それが他者の考えや日々の感性のあり方ともなるともっと知らない、わからないは当たり前だけど、それも含めて、むしろそれがあるから、自分は刺激を受ける。のかな。川崎さんの言う「キープしていく」はこの刺激を体に落とし込む少しの間、時間と空間のことかなと思いました。

川崎 6月30日 13:20

知らないことがあるから刺激を受ける、ということに同意します。現代の芸術について語るときに、「想像力」というワードがよく使われますが、「想像力」というときに想定している範囲の想像を全く超えたものごとや状況がほとんどで、そのことに気づかせてくれるのが芸術表現のひとつの力だとも思うのです。「キープしていく」は、塚原さんが言ってくれた、未知のことを落とし込むあいだの時間と空間、ということでもあるし、あと表現の自由の場を「守っていく」みたいな言葉を使いがちだけど、

守るなんて大それたことは私たちには到底できないから、キープという表現になったかもしれません。私たちができるのは、めちゃくちゃ不安定でぐらぐらしている、綱渡りみたいな保留の時間を保てるよう全力を尽くすことで、その保留の時間こそが、想像を超えた想像をつくっていくための必要なものに思えます。だから、KYOTO EXPERIMENT のような、1年に一度のいわば壮大な実験の保留時間と空間があることで、たくさんの未知や不確定なことや、快いものだけではない、日常への疑いや違和感との出会いがあり、想像の向こう側への小さな道ができるのかなと……そんなことを考えたり話して、今年のキーワードである松尾芭蕉の俳句「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」が出てきたかなと思います。

塚原 6月30日 16:21

この俳句、不勉強で知らなかったのですが、川崎さんが持ってきてくれた今福龍太さんの本『リングア・フランカへの旅』(Gato Azul、2020)に記載があってバンコクの寒いくらいクーラーの効いたカフェで読みましたね。300年以上も前に詠まれているにしては明確にビジュアルや匂いが想像できて、なんて現代的な言語感覚(芭蕉からしたら知らんがな、ですが)……と感動したのを覚えています。松茸を他者や初めて観る作品などに置き換えても、「松茸」と言語で規定される輪郭線は一見クリアに見えても、それはあくまでも形而上学的なものであって現実世界ではいろいろな細かく不明なものや概念が、しっとりと「へばりつく」ってすぐ思えたので、これまでとは思い切って方向転換し、この俳句自体をキーワードに、と決めましたよね。意図せず、混在、混生して成立している、というか、そもそもそういうもんやんな? というある種の気楽さも感じられ、そこが一番すごいような気もしています。一方で川崎さんも不穏な世界情勢について言及されていたのですが、世界はそういった考えとは逆行しているように感じられます。国境をはじめ、自己と他者、右と左、など何かを分け隔てる「境界線」のイメージは地域を問わず強化され、それぞれのテリトリーの越境が相当不自由になっているのではないかと。そういう世界線での実験、身体を起点に未知のものをつくり出すことの重要性は今後さらに大きくなると思っています。

川崎 7月1日 9:24

そうですね。ふと気づいたら、知らない葉っぱがべちゃっとへばりついているけど、そらくつつくやんな、そら知らんもんも来るわ、みたいな、ある種のウェルカムさみたいなものは実はもう全然持てないのかも、ということにこの俳句を読んで気づいたところもあります。「知ってる」と思い込んでいて知らないことがあるのに無自覚なのと一緒に、目の前にある境界線を自覚できないまま線の内側にこもっていたり、知らないうちに線を引きまくってるとか、知らない葉っぱどころか知らない何者も、くっついてたって気づかない、みたいな鈍さに、知らず知らずのうちに自分も染まっているのかも。そういう鈍さも時には防御になるのかもしれませんが、少なくとも KYOTO EXPERIMENT のような実験的・現代的な表現を扱う舞台芸術祭においては、小さくてもひとつでも感覚をひらいて、自分の範囲ではない何かを受け取れるようになりたい。時には怖くさえあるその何ものかを受け取ることが、塚原さんの言っている「越境」なのかなと思いました。そういう意味で、KYOTO EXPERIMENT の観客のみなさんは恐れずに越境してくれる方々で、心から尊敬しています。これは、ここまでフェスティバルを続けてきたから実感として得られることで、この観客のみなさんと、今年もアーティストの表現を受け取り、考えることができるのを楽しみにしています。

塚原 7月1日 13:54

京都の観客のみなさんには本当に支えられているなど感じています。フェスティバルの15年の歴史だけでなく、それまでの京都でのさまざまな表現上の実験を見てきた人たちが住んでいるのでそもそも懐が深い。そういった文化的地盤を、まだふれていない人たちにも共有したいし、次世代に渡していく必要もある。そのためには今やっていることを続けていくこと、とはいえ前提を疑いながらアップデートもしつつ、その時その時の最大の実験をやっていく必要がある。さらにこういったことが公共の予算でいま成立していることは市民の文化的な権利だとはいえ、そもそもすごいと思うし、経済的判断では計れないものの価値をみなさんで形成していきたいです。それが文化と呼ばれるものですよね。いま文字通り世界中で公共の予算で実験的な表現を生み出していくことが難しくなっているのはひしひしと感じるし、実際に話されている。さらに KYOTO EXPERIMENT には、寄付による「KEX サポーター」として、個人や団体として支えてくれる人たちがいます。売れるものが正しいとされかねない世の中で、フェスティバルとしてどういったメッセージを打ち出せるのかということも重要になってくると感じています。

📖 フェスティバルを構成する3つのプログラム

カンサイ・スタディーズ

① Kansai Studies (リサーチプログラム)

京都発の国際舞台芸術祭として、フェスティバルが立脚する「地域」について自覚的に捉え、フィールドワークを通して探求するプログラム。アーティストが中心となり、地域住民やプロデューサー、研究者と一緒に、京都や関西の文化を継続的にリサーチしていきます。活動を通じて生まれた思考の軌跡やプロセスは特設ウェブサイトに蓄積され、誰もがアクセスできるオンライン図書館として公開。未来のクリエイターや企画のためのナレッジベースや実験場、アイデアソースとなることを目指します。

📖 リサーチャー

おおしまたくろう [京都 (日本)]

ショウズ

② Shows (上演プログラム)

世界各地から先鋭的なアーティストを迎え、いま注目すべき舞台芸術作品を上演するプログラム。京都および関西における舞台芸術の変遷と動向に注目しながら、ダンス、演劇、音楽、美術といったジャンルを越境した実験的作品を紹介します。

📖 参加アーティスト [上演順]

ターニヤ・アル＝フリー & ズィヤード・アブー・リーシュ

[パフォーマンス・展示 | ベイルート (レバノン)、ニューヨーク (アメリカ)]

中間アヤカ [ダンス | 神戸 (日本)]

バック・トゥ・バック・シアター [演劇 | ジーロング (オーストラリア)]

マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター [演劇 | クアラルンプール (マレーシア)]

村川拓也 [演劇 | 京都 (日本)]

筒井 潤 [演劇 | 大阪 (日本)]

荒木優光 [音楽・パフォーマンス | 京都 (日本)]

アダム・キナー & クリストファー・ウィレス [パフォーマンス | モントリオール (カナダ)]

ALKDO / アルコド、MARJINAL、Radigals [音楽 | 豊田 (日本)・ジャカルタ (インドネシア)・シンガポール]

倉田 翠 / akakilike [ダンス | 京都 (日本)]

マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス [演劇 | ハバナ (キューバ)]

Jang-Chi × 李 銘宸 (リー・ミンチェン) × ネス・ロケ × 温 又柔

[演劇 | 東京 (日本)・台北 (台湾)・マニラ (フィリピン)]

スーパー・ナレッジ・フォー・ザ・フューチャー

③ Super Knowledge for the Future [SKF] (エクスチェンジプログラム)

アーティストは未来を予見する!? とりわけ実験的な舞台芸術作品と社会を対話やワークショップを通してつなぎ、新たな思考や対話、フレッシュな問題提起など、未来への視点を獲得していくプログラム。実験的表現が映し出す社会課題や問題をともに考え、議論し、現代社会に必要な智恵や知識を深めていきます。ここで獲得できるスーパー知識 (ナレッジ) は、予測不能な未来にしなやかに立ち向かうための拠り所となるはずです!

Kansai Studies

おおしまたくろう [京都（日本） | 展示]

ノイズ・ミュージックさがして

一超洛外でのフィールドレコーディング／異世界への綻び

*In Search of Noise Music - Field Recording in Super Other Side Kyoto
(SOS Kyoto) / Breaking-downs Leading to a Isekai*

10.4（土）-10.26（日）10:00-20:00

会場 京都芸術センター ギャラリー北・南

Kansai Studies は、フェスティバルが根ざす関西圏を対象としたリサーチプログラム。アーティストが行うフィールドワークを通して、身近な地域が内包するカルチャーや歴史、価値に光を当て、これからの実験的な表現の創作基盤としていくものだ。2025 年度はリサーチャーにサウンドコンシェルジュのおおしまたくろうを迎える。

身近な道具を改変した楽器でパフォーマンスを行うおおしまは、音楽の名を借りたユーモアによって社会をマッサージすることを企むアーティストだ。今回は、ノイズ・ミュージックという言葉のもつ矛盾した響きに着目して、ノイズ混じりな人間のあり様を調査する。動物や人工物にとっての京都を「超洛外」と名づけ、彼らの視点を借りるための自作の音響装置を用いて超音波や電磁波のフィールドレコーディングを行い、“異世界との裂け目から漏れ出る綻びの音”を採集する。

フィールドワークの様子は note にて順次公開中。また、リサーチの活動報告としての展示とイベントを、フェスティバル会期中に京都芸術センターで開催する。



© おおしまたくろう

KANSAI STUDIES

Kansai Studies note サイト

https://note.com/kansai_studies



おおしまたくろう Takuro Oshima

情報科学芸術大学院大学[IAMAS]メディア表現研究科修了。音の実験ワークショップ「SOUND やろうぜ」主宰。PLAY A DAY をモットーに、身近な道具を改変した楽器の制作とそれらを組み合わせた少し不思議な音楽活動を行う。音楽の名を借りたユーモアにより社会をマッサージする。近作にスケートボードとエレキギターを合体させて街のカタチを演走する《滑琴（かっきん）》、作家の耳を模したサウンドボックスを実家に送り母親の耳かき音をライブ配信する『帰省されるイヤー』、耳型マイクを身につけた2人の奏者の動きを作曲する《擬似耳人（ぎじじん）》など。2017年『PLAY A DAY』で学生CGコンテスト・アート部門の優秀賞を受賞。2024年『滑琴狂走曲 in 秋田！カッキンラブソディー・イン・アキタ』でやまなしメディア芸術アワードの優秀賞を受賞。



撮影：堺 俊輔

Shows

ターニヤ・アル＝フリー & ズィヤード・アブー・リーシュ

[ベイルート（レバノン）、ニューヨーク（アメリカ） | パフォーマンス・展示]

電力と権力を探して 日本初演

The Search for Power

[パフォーマンス]

10.4（土）15:00

10.5（日）13:00 / 18:00

10.6（月）14:00

10.7（火）13:00

10.8（水）13:00

10.9（木）13:00

上演時間 75 分

言語 英語（日本語通訳あり）

* 開演後は途中入場不可。小学生以下入場不可。



Photo by Elina Giounanli

[展示]

10.11（土）-11.16（日）10:00-18:00

休館日：10.27（月）、11.4（火）、11.10（月）

会場 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

レバノンの停電問題と権力の闇を 告発する、愛と復讐の宴がはじまる

中東の小国レバノンが、数十年間に及ぶ電力危機とこれに端を発する政情不安に見舞われてきたことをご存知だろうか。国から配給される電力は1日わずか数時間のため、国民は独自の解決策に頼らざるをえない。状況は2020年の金融破綻や昨今のイスラエルによるレバノン侵攻によって悪化の一途をたどるばかりだ。

レバノン内戦下（1975-90）に生まれたターニヤ・アル＝フリーと歴史家の夫 ズィヤード・アブー・リーシュは、ある停電の夜、この問題の根源を解明するプロジェクトに乗り出した。本作は「謎解きをするには最高のカップル」と自ら語る二人が見つけた事実を、観客参加型のレクチャー・パフォーマンスで告発していくものだ。

ある祝いのタベへ誘われる参加者たち。供されるのは、複数の国で収集した公文書や記録文書の数々だ。これまで隠蔽されてきた資料を含むこれらは、レバノンの電力インフラと旧宗主国や欧米間の覇権争い、マネーゲームをめぐる歴史の闇の痕跡。ひとつずつ手にとって見ていくことで、観客自身もこの歴史の継承者となっていく。上演後の空間はインスタレーションとして保存され、会期終了まで一般公開される。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

ターニヤ・アル＝フリーー Tania El Khoury

ライブ・アーティスト。ニューヨークのバード大学で、演劇・パフォーマンスプログラムの優秀レジデント・アーティストに選出、准教授を務める。同大学人権芸術センターの設立ディレクターでもある。ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校で博士号を取得。イギリスのアーティストによるコレクティブ、フォーレスト・フリンジのアソシエイト・アーティスト。レバノンで都市のリサーチとライブ・アートに関わるコレクティブ、ディクタフォン・グループの創立メンバー。集団的記憶の構築と連帯感の醸成について考える、双方向的なインスタレーション作品、パフォーマンスを創作する。ターニヤ・アル＝フリーーの作品は、アーティスト本人や協働者によって集められ、取捨選択された触覚的、聴覚的、視覚的な素材によって命を吹き込まれ、最終的には観客の参加によって変容する。それらの作品は、強制退去、国境制度、民営化、国家による暴力、空間の政治学といった問題を扱い、いくつもの言語に翻訳され、6大陸、32ヶ国で、美術館からケブルカーまで、様々な場所で発表されている。ハーブ・アルバート芸術賞、ソロス芸術フェローシップ、ベッシー賞優秀作品賞、ANTI 国際ライブ・アート賞、トータル・シアター賞、ザ・アーチーズ・ブリック賞を受賞。これまでに ANTI フェスティバル（フィンランド）のアドバイザー・ボードに参加し、現在は CAPIm-The Centre for Art and the Political Imaginary（芸術と政治的想像のセンター／スウェーデン）でアドバイザー・ボードのメンバーを務める。



Photo by Nour Annan

ズィヤード・アブー・リーシュ Ziad Abu-Rish

近代中東・北アフリカ（MENA）地域の研究者。アメリカのバード大学で、人権と中東研究の准教授を務める他、人権と芸術に関する修士課程のプログラムを統括する。研究の中心は、特にレバノンとヨルダンにおける、国家の形成、経済発展、大衆動員。アメリカのジョージタウン大学・現代アラブ研究センターでアラブ研究の修士号、ロサンゼルスのカリフォルニア大学で歴史学の博士号を取得。著書に『The State of Lebanon: Popular Politics and Institution Building in the Wake of Independence（レバノン国家：民衆政治と独立後の制度構築）』（スタンフォード大学出版局より出版予定）、共同編著に『The Dawn of the Arab Uprisings: End of an Old Order?（アラブ蜂起の夜明け：旧体制の終焉？）』（2012）がある。「Garbage Politics in Lebanon（レバノンにおけるゴミをめぐる政治）」「Municipal Elections in Lebanon（レバノンの地方選挙）」「Lebanon Beyond Exceptionalism（レバノン—例外主義を超えて）」など、いくつもの記事や書籍の章を執筆している。「アラブ研究ジャーナル」およびウェブマガジン「Jadaliyy」の共同編集者、レバノン論文夏季研修の共同ディレクターも務める。



中間アヤカ [神戸（日本） | ダンス] 再創作

Hello, I'm Your New Neighbor. / こんにちは、今日からお隣さんです。＜翔んで京都編＞

Hello, I'm Your New Neighbor. <Fly Me to the Kyoto>

10.4（土）15:30
 10.5（日）11:00
 10.7（火）15:30
 10.9（木）14:30
 10.10（金）16:30
 10.11（土）11:00
 10.12（日）11:00

* 受付開始は開演の 30 分前

会場 京都市内

上演時間 60 分（予定）



撮影：阪下混成

* 屋外を歩きながら参加いただくツアー型作品です。開演時間に遅れた場合、ご参加いただけません。
 雨具、歩きやすい服装、熱中症対策など各自ご準備ください。またお荷物のお預かりはできかねますので、軽装でご参加ください。
 雨天決行。荒天の際は公演内容を変更または中止する場合があります。フェスティバルの公式 X アカウントでお知らせします。

“ご近所さん”の距離感で

まちを見つめる歩行パフォーマンス

庭で他者の記憶を踊る 4 時間のソロダンス、空き地に仮設劇場を建てて、踊り、解体するまでを見届けるプロジェクト——。中間アヤカは舞台と観客の境界線をゆるやかにしながら、「ダンスとしか呼ぶことのできない現象」が自身と他者の間に現れる瞬間を大切に描き出してきた。今回は 2024 年に神戸・新長田で、自身のスタジオのお披露目イベントとして行った「歩行パフォーマンス」の京都出張編を上演。京都市内を観客と共にツアー形式でおさんぽ。“お隣さん”に引越しのあいさつに行くような親しみを込めて地域をめぐり、歩行の周辺にある出来事をダンスとして立ち上がらせていく。

劇場はともすると閉鎖的で、個々に完結しているようにも見えるけれど、演じる人がそこにいる時間、観客が向かう途中、帰り道に、目に見えない作用を周囲に及ぼしている（はず）。そこに「歩くこと」でするりと分け入っていく中間の試みは、小さな点と点を結んで地図や星座を描くことに似ているのかも。

助成：クリエイター支援基金



中間アヤカ Ayaka Nakama

ダンサー。1992 年別府生まれ、神戸在住。これまでに黒沢美香、contact Gonzo、チェルフィッチュ等の作品に出演。近年は自身の作品創作に積極的に取り組んでおり、「ダンスとしか呼ぶことのできない現象」を追い求め、それが現れる瞬間を他者と共有するための仕掛けを創り出すことに挑戦している。これまでの作品に、庭で他者の記憶を踊る 4 時間のソロダンス『フリーウェイ・ダンス』、空き地に建てた仮設劇場を運営し解体までを見届ける『踊場伝説』などがある。2018-2020 年度 DANCE BOX アソシエイト・アーティスト。2022 年度よりセゾン文化財団セゾン・フェロー。第 16 回神戸長田文化奨励賞受賞。



Photo by Bea Borgers

バック・トゥ・バック・シアター [ジーロング（オーストラリア） | 演劇] 日本初演

いくつもの悪いこと

Multiple Bad Things

10.4（土）17:00

10.5（日）15:30 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 rome シアター京都 サウスホール

上演時間 60 分

言語 英語（日本語・英語字幕あり）

*15 歳以上推奨



Photo by Jeff Busby

悪夢か予言か、ホラーコメディか？

差別と悪意が渦巻く職場へようこそ

知的障害やニューロダイバーシティ（神経多様性）*を自認するパフォーマーを中心とする劇団として、30年以上活動してきたバック・トゥ・バック・シアター。鋭い批評性、挑発的な演目で世間の前提を揺さぶってきた彼らは、2024年のヴェネチア・ビエンナーレ演劇部門で金獅子生涯功労賞を受賞！その興奮冷めやらぬなか、2年ぶりにKYOTO EXPERIMENTで新作を上演する。

ここは“世界の果て”にある倉庫。暗雲が垂れ込め、不穏な音が鳴り響くなか、3人の労働者が奇妙にねじれた建造物を組み立てている。そんな彼らを監視する1人の男。一見すると「多様性や平等を重んじる職場」だが、疲労や気づかいの限界が近づく状況は一変。ジェンダーや個人の尊重は失われ、互いの偏見や差別、支配欲が露見しはじめる。エスカレートする悪行、自己正当化に満ちた怒声で世界が歪んでいく今、次にスケープゴートになるのは誰か——？意外な結末が待っているものの、彼らが「これは演劇です。現実ではありません」と主張するのがめっぽう怪しい。これは既に現実で起こったこと？それとも近い将来の予言めいた黙示録？

* 脳や神経、またはそれに起因する個人の特性の違いを多様性と捉え、尊重しあう考え方。発達障害のひとつである自閉症の当事者による市民運動として発展した経緯がある。

バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre

バック・トゥ・バック・シアターは、先住者・ワタウロングの土地であり、ビクトリア州の中心地であるジーロングを拠点とし、国内外で重要な位置を占めるオーストラリアの劇団として広く知られる。劇団の活動は、知的障害、またはニューロダイバーシティ（神経多様性）を持つ所属俳優たちが中心となっている。バック・トゥ・バック・シアターは、オーストラリアの最も重要な文化的発信のひとつと考えられている。また、プロフェッショナルな活動だけでなく、世界各地のコミュニティと積極的なコラボレーションも展開しており、障害のある人々の社会包摂の向上、優れた芸術性に焦点を当てている。



Photo by Ferne Millen

マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター [クアラルンプール（マレーシア） | 演劇] 日本初演
トゥアの片影
Fragments of Tuah

10.4（土）18:30

10.5（日）13:00 ★ / 17:30

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 romeシアター京都 ノースホール

上演時間 75 分

言語 英語・マレー語（日本語・英語字幕あり）



Photo by Mark Teh

マレーシアの伝説的英雄に見る
ロマンと神話とナショナリズム

現代マレーシアを代表する演出家でキュレーター、研究者のマーク・テが、自国の現代史の影を描いた演劇『Baling（バリン）』以来、9年ぶりに京都で公演。最新作はマレーシアで育った人なら誰もが知っている英雄「ハン・トゥア」の複層的な実体がテーマだ。

15世紀、マラッカ王国の黄金時代に活躍したとされる戦士トゥアは主君への忠誠心や勇敢さで知られ、時を経た今日ではマレー民族主義のシンボルへと変貌した。道路やスタジアム、コーヒーにトゥアの名が冠され、数多の映画や書籍で描かれてきたことでもおなじみだ。

マーク・テと彼が協働するパフォーマー、デザイナー、研究者のチームは、この英雄のイメージが歴史のなかでいかに変容し、時に国家の神話づくりに利用されてきたかを、各地に残るトゥアの痕跡をたどりながら探求。マルチメディアと楽曲を駆使し、時を超えた壮大なドキュメンタリー・パフォーマンスとして編み上げた。巡った土地はバリ島からロンドン、沖縄まで。トゥアは本当に実在したのか、虚像なのか。ヒーローか、イデオロギーの体現者か。歴史的英雄になる方法とは？あなた自身の目で、その答えを探してほしい。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金


マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター Mark Teh / Five Arts Centre

マレーシアのクアラルンプールを拠点とするパフォーマンス作家、研究者、キュレーター。ロンドン大学ゴールドスミス校芸術政治専攻で修士課程を修了。協働的で、多岐に渡るマーク・テのプロジェクトは、ドキュメンタリー的、思索的、生成的な形式をまとい、歴史のもつれや記憶、反地図学、政治的な内容を提示する。活動はおもにパフォーマンスの分野で行われるが、展覧会、教育、社会活動、執筆、キュレーションにも広がる。

マーク・テの作品と活動は、イルハムギャラリー（クアラルンプール）、OzAsia フェスティバル（オーストラリア・アデレード）、シュビラート演劇祭（ドイツ・ミュンヘン）、ソウル・パフォーマンス・フェスティバル、BIPAM（バンコク国際舞台芸術ミーティング）、YPAM（横浜国際舞台芸術ミーティング）、クンステン・フェスティバル・デザール（ブリュッセル）、MAIAM 現代美術館（タイ・チェンマイ）、コムニタス・サリハラ芸術センター（ジャカルタ）、東京芸術劇場、山口情報芸術センター（YCAM）、ファスト・フォワード・フェスティバル（アテネ）、MMCA ソウル館、世界文化の家（ベルリン）、クアラルンプール舞台芸術センターなどで紹介されている。2024年には、プリンス・クロース基金／ブリティッシュ・カウンシル・フェロー賞「Moving Narratives」に選ばれた他、in-tangible institute が実施するプラットフォーム「Pollination」の共同キュレーターを務める。



村川拓也 [京都（日本） | 演劇] 新作

舞台版『テニス』

Tennis (stage version)

10.9（木）16:00
10.10（金）14:00 ★
10.11（土）14:00 / 18:00
10.12（日）14:00
10.13（月・祝）12:00
★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都市左京東部いきいき市民活動センター
上演時間 80 分（予定）
言語 日本語（英語字幕あり）



© 朝日克俊『テニス』

「テニスコート」という舞台装置が
若者の群像を映し出す

舞台上のテニスコートでテニスをしたり、他愛のない会話を楽しむ学生たち。若者特有のにぎやかさと不意に訪れる暇な時間が混じった風景に被せるように、そのなかの数名に“実際に”行ったインタビュー音声が流れる。ぽつりぽつりと語られる彼らの生い立ち、そして現在。思いがけず彼らの複雑な事情を知ることになる私たちは、その時何を思うだろうか。一方、コート上で朗らかに続いていくテニスの光景から何をみるだろうか。

演劇と並行して学んだドキュメンタリー映画の手法を用いて、村川拓也は虚構とリアル、偶然性が作用しあうオルタナティブな世界を描いてきた。ドキュメンタリー映画『テニス』（朝日克俊監督）を原作にした本作は、自分と他者の間に横たわる近くて遠い距離を映し出す。公演会場は左京区岡崎にある市民活動センターの集会室。ごくありふれた日常と地続きの場所で、上演は行われる。

主催：KYOTO EXPERIMENT、左京東部いきいき市民活動センター（指定管理者：特定非営利活動法人劇研）
助成：クリエイター支援基金

*左京東部いきいき市民活動センター（指定管理者：特定非営利活動法人劇研）芸術・文化を活用した地域のまちづくり事業
取り組み | 『多様な交流の促進事業』



村川拓也 Takuya Murakawa

演出家・映像作家。ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を、映像・演劇・美術など様々な分野で発表している。虚構と現実の境界に生まれる村川の作品は、表現の方法論を問い直すだけでなく、現実世界での生のリアリティとは何かを模索する。介護する／される関係を舞台上で再現する『ツァイトゲーバー』（2011～）はシンガポール、ドイツなど国内外で上演を重ねている。近作に『インディペンデント リビング』（2017）、『ムーンライト』（2018）、『Pamilya（パミリヤ）』（2020）、『事件』（2021）、『仕事と働くことを演じる』シリーズ（2022～）など。2016年に東アジア文化交流使（文化庁）として中国・上海／北京に滞在。2022年に第21回AAF戯曲賞にて、『事件』が特別賞を受賞。京都芸術大学映画学科、東京造形大学映画・映像専攻領域非常勤講師。



Photo by Guoqing Jiang

筒井 潤 [大阪（日本） | 演劇]

墓地の上演

Performing the Cemetery

10.9（木）18:00
10.10（金）18:00
10.11（土）13:00
10.12（日）18:00
10.13（月・祝）15:00

会場 THEATRE E9 KYOTO

上演時間 180 分

言語 日本語（英語字幕あり）



* 上演中に観客との対話の時間があります

大文字の「国家の歴史」に抗う
個人の戦争体験と記憶のアーカイブ

戦後 80 年の今、舞台芸術はいかに戦争の記憶を継承し、他者との対話の場を拓きうるのか。公演芸術集団 dracom を率いる筒井潤が、大阪市の旧真田山陸軍墓地をめぐるリサーチとヒアリングを重ねて 2024 年に発表した演劇『墓地の上演』は、その嚆矢となる実験的な試みだ。

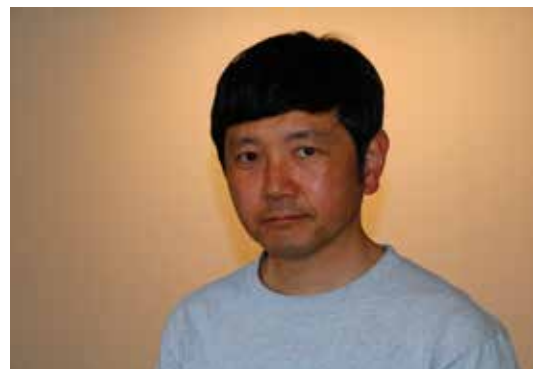
1871 年に設置された国内最古にして最大の陸軍埋葬地には、軍と戦争に関わった人びとの約 5000 基の墓碑と 5 基の合葬墓碑、そして 8000 以上の遺骨が納まる納骨堂がある。ここから殉国や英霊の大義とは対極にある「個人の記憶と記録」を掘り上げ、6 つの短編を創作した筒井。時代は西南戦争後から現代まで。わたしたちは断片的ながら、個人史を通した近代日本の歩みを目撃することとなる。

本作の上演構造は特殊で、短編の上演順は観客が引くクジで決定し、「観客参加の対話」の時間を挟んで、もう一度上演が行われる。それも各回 5 編のみが上演されるため、常に見落とされる物語が出てしまう。「語られ方」を恣意的にずらすことで、観る人の印象を揺さぶっていく本作は、歴史における「語りの危うさ」への問題提起にもなることだろう。

* 本作の初演は、京都芸術大学共同利用・共同研究拠点形成事業〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉2023 年度テーマ研究 I「舞台芸術を用いた〈他者〉との対話の場の構築と継続―旧真田山陸軍墓地を巡る二つの創作を通して」(研究代表:岡田路子)の劇場実験にて、上演されました。

筒井 潤 Jun Tsutsui

演出家・劇作家。大阪・北摂を拠点とする公演芸術集団 dracom のリーダー。2007 年京都芸術センター舞台芸術賞受賞。Segal Center Japanese Playwrights Project 2018 において日本現代演劇の優れた戯曲の 1 つとして代表作『ソコナイ図』が選出される。dracom としてサウンド・ライブ・トーキョー 2014、東京芸術祭ワールドコンペティション 2019、NIPPON PERFORMANCE NIGHT (デュッセルドルフ) などに参加。個人としては DANCE BOX 主催『新長田のダンス事情』(TPAM2014 参加)で演出、ルリー・シャバラ『ラウン・ジャガッ: 極彩色に連なる声』(KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN)で空間演出を担当。他に山下残、マレビトの会、維新派、桃園会、羽鳥嘉郎、akakilike、悪魔のしるし、ホー・ツーニエン、Mi-Mi-Bi などの公演や作品に参加した。



荒木優光 [京都（日本） | 音楽・パフォーマンス] 新作

ノー・ボンチ（ファストリサーチスクラッピング）

NO, BONCHI (Fast Research Scrapping)

10.10（金）18:00 ★

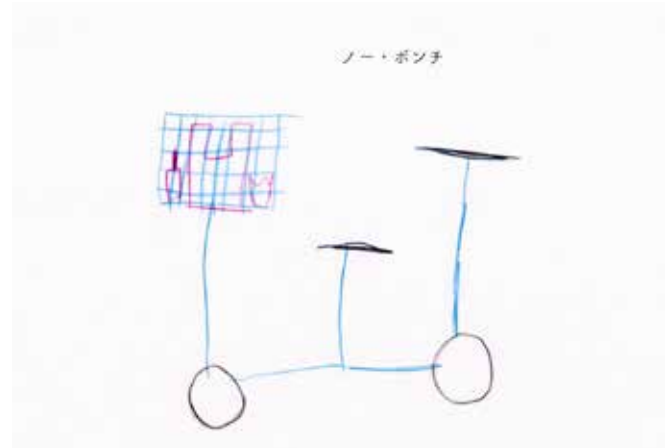
10.11（土）16:00

10.12（日）16:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場📍 ロームシアター京都 ノースホール

上演時間📍 60 分（予定）



Artwork by 荒木 輪

自転車都市・京都を音で体感。
「サイクリングサウンドシアター」

フェスティバルの柱のひとつである地域のリサーチプログラム「Kansai Studies」。この過去のアーカイブと 1970 年代末の N.Y. におけるアンダーグラウンドな音楽ムーブメントに触発され、独自のフィールドワークを元にした新作を発表する荒木優光。今回はコンパクトな都市・京都の日常に欠かせない自転車に着目し、独創的な「サイクリングサウンドシアター」を立ち上げる。

“ファストリサーチ”と自ら名付けた短期リサーチにより、自転車の機能や構造、京都における移動性やポテンシャルを引き出していく荒木は、これらを即興的・身体的なアプローチでスクラップしながら楽曲を創作していく。一方で、自転車を活用したサウンドデバイスを新たに開発。動力源となる漕ぎ手によるパフォーマンス、街や人の声、路上からの中継が、混沌としながらも共鳴していくライブを通して、現代都市・京都のエネルギーで実験的なサウンドスケープを体感してほしい。

助成：クリエイター支援基金



荒木優光 Masamitsu Araki

アーティスト・音楽家・サウンドデザイナー。1981 年山形県生まれ、京都拠点。音楽を活動の主体としながらもその周縁に立つことを起点として、聴くことの創造性をユーモラスに追求し、文脈や効用の再考を促す。独自の解釈とプロセスによって音場空間を構築し、シアターピースやインスタレーション、パフォーマンス、ツアー、音源など多岐にわたる形態で発表している。近年のパフォーマンス作品に、『空地の TT』（サウンドア라운드 004 げんし、ロームシアター京都、2024）、『サウンドトラック フォーミッドナイト 屯』（KYOTOEXPERIMENT 2021 AUTUMN、比叡山山頂駐車場、2021）、『パブリックアドレス 音場』（Kunstenfestivaldesarts、ブリュッセル、2021）、『ゾンビとサウンドトラック』（京都市京セラ美術館 講演室、2021）など。個展に、「ダンスしないか？」（長野県立美術館 アートラボ、2022）、「そよ風のような、出会い」（gallery α M、東京、2022）、「わたしとゾンビ」（京都市京セラ美術館 ザ・トライアングル、2020）など。音楽グループ NEW MANUKE のメンバーとしても活動している。



アダム・キナー & クリストファー・ウィレス [モントリオール（カナダ） | パフォーマンス]

MANUAL

10.13（月・祝）-10.22（水）

12:00 / 12:20 / 12:40 / 13:00 / 13:20 / 13:40 / 14:00

14:20 ◎ / 15:40 / 16:00 / 16:20 / 16:40 / 17:00

17:20 / 17:40 / 18:00 / 18:20 / 18:40 / 19:00

* 受付開始は各日 11:30 より。集合時間は各回開演の 10 分前。

会場 伊藤記念図書館（京都市立芸術大学附属図書館）

上演時間 45 分

言語 日本語（◎の回は、英語での上演）



撮影：吉本和樹 提供：京都市立芸術大学

* 各回定員 1 名。14 歳以下入場不可。

集合時間（開演時間の 10 分前）に遅れた場合はご参加いただけません。ご注意ください。日時の振替や返金等もいたしかねますので、あらかじめご了承ください。歩きながら参加いただく作品です。イヤフォンの装着やテキストを読む場面があります。観客と近い距離でパフォーマンスが行われます。階段での昇り降りが難しい方や参加をキャンセルされる方は、事前に KYOTO EXPERIMENT チケットセンターまでご連絡ください。

知と感性の交差点「図書館」の 時空を旅するパフォーマンス

共にカナダを拠点に、公共空間におけるサウンドと観客参加に焦点を当てた領域横断的な作品を手がけてきたアダム・キナーとクリストファー・ウィレス。二人の共同作品『MANUAL』は世界各地の図書館を舞台に、一人のパフォーマーが一人の観客のために上演する親密なパフォーマンス作品だ。今回の舞台は、2023 年に京都駅東にキャンパスを移転した京都市立芸術大学の伊藤記念図書館（附属図書館）。2 人は関西を拠点とするアーティストと共創しながら、今ここでしか出会えない特別な時間と空間を立ち上げていく。

指定された場所で待ち合わせた観客とパフォーマー（案内人）は、館内をそっと探検しながら、共に本を眺めたり、読んだり、イヤフォンから流れる音に耳を澄ませていく。深く集中するほどに鋭敏になる五感、高まる没入感。施設の日常と交錯しながら秘密裏に、スリリングに進む一連の体験は、「感覚をひらく場」としての図書館を自分自身の手で再発見していく試みなのかもしれない。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

アダム・キナー & クリストファー・ウィレス Adam Kinner & Christopher Willes

アダム・キナーとクリストファー・ウィレスは、通常とは異なる知覚認識を探求する上演作品の創作を行う。それらの作品は、しばしば公共空間で上演され、没入的な音響やリスニングへの関心、観客の視点、そして参加型芸術作品としての可能性によって形成される。『MANUAL』は、モントリオールのダンス・アーティスト、ハナ・シュビレ・ミューラーとのコラボレーションによって創られた。



撮影：吉本和樹 提供：京都市立芸術大学

Punk and Beyond [音楽・上映会&トーク]

会場  CLUB METRO

[ライブパフォーマンス]

10.18 (土) 16:00

10.19 (日) 18:00

上演時間  180 分 (予定)

*12 歳以下入場不可。大きな音が出ます。
オールスタンディング形式で、座席はありません。
チケット料金のほか、入場時に、I drink (¥600) が当日別途必要です。



出演  ALKDO / アルコド [豊田 (日本)], MARJINAL [ジャカルタ (インドネシア)], Radigals [シンガポール]

[トーク&上映会]

10.16 (木) 17:00

* チケット料金のほか、入場時に、I drink (¥600) が当日別途必要です。

プログラム 1

トークイベント: 「京都とパンクおよび日本のパンクの歴史」 (17:00-18:15)

ゲスト: マーフィー・マハン (京都大学法学研究科准教授)

司会: 川上幸之介 (倉敷芸術科学大学芸術学部准教授)

プログラム 2

上映会 & トーク: 「東南アジアのパンクのあり方」 (18:30-21:30)

トークゲスト: 居原田遥 (京都芸術大学大学院芸術専攻講師)、高崎英樹 (BRONZE FIST RECORDS 主宰)

司会: 川上幸之介 (倉敷芸術科学大学芸術学部准教授)

上映作品:

・『このシーンはわたしたちのものでもある!』
(原題: Ini Scene Kami Juga!、監督: ヘラ・マリー、日本語字幕: 徳永リサ、68 分)
インドネシアの女性パンクス 14 人が語り尽くすドキュメンタリー。

・『Punk Save the Queen』(監督: 久保田徹、20 分)
2021 年の軍事クーデター以前のミャンマーで活動するパンクを追ったドキュメンタリー

・『Anarchy in the Philippines』(監督: ジェス・コール、8 分)
フィリピンのパンクを追ったドキュメンタリー。

・『Female Ego』(監督: ラッセ・ネヴァラ、4 分)
ネパールの女性パンクを追ったショートドキュメンタリー。

社会運動としてのパンク音楽に ライブ公演&映像で迫る

反体制、社会批判、アナキズム、DIY。1970年代に興隆し、世界的なムーブメントとなったパンクカルチャーを演劇やダンスのように多面的な表現形式、あるいは社会運動と捉え、日本を含むアジア圏のパンクミュージックにおける独自の文脈と現在地を追う企画。注目のバンド3組によるライブと、主に東南アジアのパンクスを追ったドキュメンタリー映画を一挙に上映するイベント&豪華トークの2つの軸で展開する。

公演を行う海外勢は、アジア有数の盛り上がりを見せるジャカルタのパンクシーンの代表格で、ストリートキッズや貧困層に生活の場を提供し、共にアート活動を行う「MARJINAL」、シンガポール発の女性バンドで、フェミニズムに根ざした力強いメッセージを放つ「Radigals」。日本からは、橋の下世界音楽祭の代表を務める永山愛樹によるアコースティック・パンクデュオ「ALKDO / アルコド」が登場。鮮烈なサウンドに乗せて発せられる、貧困や抑圧など社会問題に対する怒りや不満、行動を促すメッセージにも注目したい。専門家によるトークでは、歌詞の言語性やソーシャルな試みなど、アジア特有の社会状況を反映する音楽性と活動の広がりについても考察していく。

共同キュレーション：川上幸之介（倉敷芸術科学大学芸術学部准教授）

ALKDO / アルコド

愛知是三河、豊田市を拠点に国内外で活動する大所帯バンド「TURTLE ISLAND」のフロントマンである永山愛樹 (Vo,G) と竹舞 (Vo,puk(韓太鼓)) からなる最小編成。パンクスピリット & 現代アジアの原始的音楽。シンプルでオリジナル。基本は2人だが、その時々各地で様々なメンバーが加わりながら形を変え全国津々浦々巡業を続けている。2022年7月には3枚目のアルバム「自在遊睡時代到来」をリリース。2012年からレーベルmicroActionと共に「橋の下世界音楽祭 SOUL BEAT ASIA」を主催、また豊田市駅前にて古民家をリノベーションしたお座敷カルチャーセンター「橋ノ下舎」を運営し、2021年から橋ノ下農園も始まり、音楽以外にもローカルワークとして様々な表現と多様な人々の集うコミュニケーションの場を日常的に創造し続けている。バンド名「ALKDO / アルコド」とは、愛樹のルーツである朝鮮半島の言葉でアルは“naked”、コドは“TURTLE ISLAND”で、“Naked Turtle Island”要は“Acoustic Turtle Island”の意の造語である。

MARJINAL

インドネシア・ジャカルタを拠点に活動するパンクバンド「MARJINAL(マージナル)」。

1996年にマイク (Vo/G) とボブ (Vo/B) により結成。力強いメッセージと親しみやすい楽曲、アートや社会運動を通じた精力的な活動は、国境や世代を越えて絶大な支持を集めている。彼らが運営する生活共同体「タリンバビ」では、子どもから大人まで無償で受け入れ、衣食住の提供と共にアートを通じた生きる知恵を伝える。チャリティ、災害支援、木版画ワークショップ、ライブや講演など啓発的な活動を28年間継続。揺るがぬ信念と献身的な社会貢献は国内外で高く評価され、世界中で人々を鼓舞し、パンクが変革と連帯の力であることを体現し続けている。

Radigals

2012年後半に結成された、シンガポールの4人編成ハードコア・バンド。音楽を通して、特に社会的に追いやられたコミュニティに向けて、女性の権利拡大、自己肯定、支援のメッセージを描く。困難に打ち克つこと、声を上げること、社会的規範を問い直すことをテーマとして掲げることが多い。結成以来、何枚かのEPやシングルを発表しており、それを通して包摂性を訴え、ハードコア・シーンやその外での女性への差別に挑む。音楽活動以外では、ZINEの編集・発行を行い、少女期や10代の経験に関わるテーマを掘り下げている。

alkdö



Photo by lwunk



倉田 翠 / akakilike [京都(日本) | ダンス] 新作

病癒えし者の着色された魚への聖なる感謝の歌

Holy Song of Thanksgiving of a Convalescent to the Colored Fish

10.17 (金) 18:30

10.18 (土) 13:30

10.19 (日) 15:00 ★

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都芸術劇場 春秋座

上演時間 70 分 (予定)

言語 日本語 (英語字幕あり)

*上演中にクスノキ等の木屑が舞う可能性があります。



撮影：前谷 開

食の幻想に支配されない
自由な身体はあるのか？

食や健康についての情報があふれる現在、「何を食べるべきか」という基準はとても曖昧だ。時代や環境によっても変わるし、メディアやブームに左右されることもある。絶対的なものなどないはずなのに、私たちはなぜ世間でなんとなく「正しい」とされている思考に振り回され、身体をコントロールしなければならない気がするのだろう。どんなに他者と相容れない食の嗜好を持っていたとしても、誰かと共に食卓を囲みたいと願ってしまうのだろう。徹底的にフィクションでありながら、常に現実の自分自身と社会の間にある問題をダンスへ結実させてきた倉田翠の新作は、玉石混交の現代の「食自論」とその可笑しみを浮き彫りにしていく、フィクショナルで実験的な試みだ。

倉田と共に舞台に立つのは、俳優と彫刻家、喫茶店の店主の3名。彼らは公演前の約2ヵ月間、日常の食習慣を少しズラシ(好きなものを我慢したり、ちょっと偏った食べ方をしたり)、そのズラされた身体のまま舞台へ上がる。社会や自身が定義する「正しい食」から切り離され、無意味なアクションを課せられた彼らの身体が織りなす、不協和音のような四重奏は何を語りかけてくるだろうか。

倉田 翠 Midori Kurata

1987年三重県生まれ。京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)映像・舞台芸術学科卒業。3歳よりクラシックバレエ、モダンバレエを始める。京都を拠点に、演出家・振付家・ダンサーとして活動。作品ごとに自身や他者と向かい合い、そこに生じる事象を舞台構造を使ってフィクションとして立ち上がらせることで「ダンス」の可能性を探求している。2016年より、倉田翠とテクニカルスタッフのみの団体、akakilike(アカキライク)の主宰を務め、アクターとスタッフが対等な立ち位置で作品に関わる事を目指し活動している。2023年には、akakilike初期の代表作とも言える『家族写真』でクンステン・フェスティバル・デザール(ブリュッセル)とフェスティバル・ドートンヌ(パリ)に招聘され、初の海外ツアーを果たす。令和5年度京都市芸術新人賞。第18回日本ダンスフォーラム賞。2024年4月より、まつもと市民芸術館芸術監督(舞踊部門)。

akakilike

akakilike(アカキライク)は、テクニカルスタッフと倉田翠のみで構成され、主に舞台作品を作る。スタッフと出演者が常に対等であること。それぞれが確立して作品のためにやるべきことをするために集まった集団。



Photo by Bea Borgers



撮影：前谷 開

マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス [ハバナ（キューバ） | 演劇] 日本初演

私はユニコーンではない

No Soy Unicornio

10.24（金）16:00 ★

10.25（土）18:00

10.26（日）18:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 京都芸術センター 講堂

上演時間 40 分

言語 スペイン語（日本語・英語字幕あり）



©Joanna Montero

*14 歳以上推奨

ジェンダーの連帯と抵抗の

シンボルとしてのユニコーン

伝説の美しき一角獣ユニコーン。その気高さと純粋さから LGBTQ の象徴としても知られる聖獣は、見る人によっては可愛いキャラクター、または奇形や蔑みの対象となるかもしれない。こうした複層的なイメージを持つユニコーンに、父権性が強く残るキューバで抑圧されてきた女性や性的マイノリティ、彼らのユートピアを重ねたのが、詩人で劇作家、パフォーマーのマルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナスだ。「わたしはユニコーンではない」を意味する逆説的なタイトルの下、カデナスは自らの身体と映像、パーソナルな記憶、ファンタジーを織り交ぜながら、自由を希求する叙情詩を紡ぐ。

「わたしの角は奇形ではない。わたしの愛は奇形ではない。わたしの裸は奇形ではない」。鮮烈な詩に導かれる物語は、アイデンティティとしての角を獲得したユニコーン（仮面を被ったカデナス）が、首都ハバナを彷徨う映像からはじまる。並行して舞台上では、カデナスがユニコーンのオブジェを並べ、ひとつの世界を築いていく。全編を貫くのはユニコーンたちへの鼓舞と連帯のメッセージ。ここ日本の声なき声とも、きっと共鳴することだろう。

マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス Martha Luisa Hernández Cadenas

作家、パフォーマー。1991 年、キューバ・グアantanamo生まれ。別名マルティカ・ミニプント（Martica Minipunto）。キューバ芸術大学 / 高等芸術院で演劇を学ぶ。パフォーマンス作品に、『Nueve』（2017）、『私はユニコーンではない』（2019）、『Escribir con la lengua』（2022）など。カデナスの作品は、コロンビア、アルゼンチン、チリ、メキシコ、スペイン、ドイツ、カナダ、スイスで紹介されている。『私はユニコーンではない』は、2022 年のチューリヒ・シアター・スペクタクル（スイス）で、ZKB Acknowledgement Prize を受賞。詩集として、2017 年の David de Poesía 賞を受賞した『Días de hormigas（蟻の日々）』（Ediciones Unión, 2018）、『Los vegueros』（Colección Sureditores, 2019）、『El Palacio de las Ursulinas』（Ediciones La Luz, 2021）がある。小説『La puta y el hurón（娼婦と白イタチ）』（Caballo de Troya, 2023）は、2020 年に INCUBADORA が実施しているフランツ・カフカ賞（小説部門）を受賞。最新作『Puro flash』は、トイレを舞台に起こる架空の物語。独立系出版社 ediciones sinsentido の創立者でもある。



Jang-Chi × 李 銘宸（リー・ミンチェン）× ネス・ロケ × 温 又柔

[東京（日本）・台北（台湾）・マニラ（フィリピン） | 演劇]

日本初演

クルージング：旅する舌たち

Cruising: Traveling Tongues

10.24（金）19:00

10.25（土）15:00 ★

10.26（日）15:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場 romeシアター京都 ノースホール

上演時間 60 分（予定）

上演言語 日本語、英語、フィリピン語、台湾華語、
カバンバンガン語、台湾語（日本語・英語字幕あり）



Photo by Grace Lin © 2024 TPAC.

* 独特の強いにおいが発生する食材を使用する可能性があります

海を越えて混ざり合う

食と言語をめぐる記憶の旅へ

アジアの島々を群島と捉え、台北アーツフェスティバルが実施するリサーチプログラム「Cruising」。2024 年は日本・フィリピン・台湾を拠点とするアーティスト 4 名が「食」をテーマに、文化やアイデンティティの多層性、混交性に着目したリサーチを台北と関西で行った。そこから豊かに実ったパフォーマンス作品を、台北に続き京都で上演する。

メンバーはアーティスト・コレクティブ「オル太」メンバーの Jang-Chi、台北拠点でパフォーマンスとビジュアル・アートを横断した活動を行う李銘宸、フィリピン出身の俳優・ドラマトゥルクのネス・ロケ、台湾生まれで日本語で小説を執筆する温又柔。それぞれの母語とそうでない言語が飛び交う舞台では、さまざまなトピックが旅していく。話題は太古の島々の発酵食から、互いの言語や翻訳にまつわるエピソード、大切な味の記憶まで。やがてキッチンでもある舞台上、できあがるものとは。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金

共同製作：KYOTO EXPERIMENT、台北パフォーミングアーツセンター、国際交流基金

* 令和 7 年度国際交流基金舞台芸術国際共同制作事業として制作

TAIPEI
PERFORMING ARTS CENTER



中 央
大 学
北 京
演 劇
院



JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

Jang-Chi

舞台作家・美術家。東京拠点。2009年にアーティスト・コレクティブ「オル太」を結成し、近年ではビジュアルアーツ／パフォーミングアーツの制度とのユーモラスで挑発的な折衝や、社会学的／民俗的フィールドワークを重ねながら、インスタレーション、映像、ゲーム、演劇など分野横断的な身体表現を展開している。これまでの作品では、近代化における都市と産業の関係性、様々な人種やジェンダーのなかで画一的には語ることができない社会や歴史の複雑さに焦点を当ててきた。オル太の最新プロジェクトには、YPAM から委嘱を受けた『ニッポン・イデオロギー』（2023～）や『Living Conditions』（豊田市美術館、2024）がある。国際芸術祭「あいち 2025」では新作を発表する。公益財団法人セゾン文化財団セゾン・フェロー。



李 銘宸（リー・ミンチェン） Ming-Chen Lee

演劇アーティスト、ビジュアルデザイナー、写真家。
2009年より風格渉／社（FONG KO SHE）の名でパフォーマンス／演劇作品を創作、発表している。演出家として他のアーティストとの共同制作やコラボレーションも行う。舞台芸術、ドラマトゥルク、ビジュアルアート、サウンドアート、デジタルアート、写真など多様な分野で活動している。主な創作アプローチとして演劇を活用し、集団的即興を用いる。日常生活からインスピレーションを得て、モノの曖昧さや共感覚に焦点を当て、台湾の現代的なアイデンティティと人新世が混ざり合った現実／混沌を重層的に描く作品を制作している。



ネス・ロケ Ness Roque

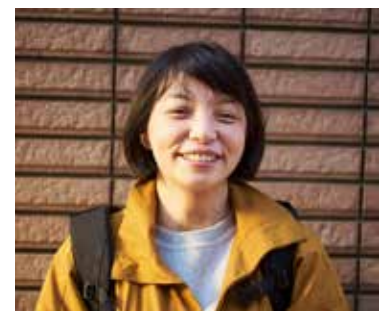
俳優、ドラマトゥルク、教育者。1991年フィリピン・アンヘルズ生まれ。演劇、映画や社会課題の解決についてのプロジェクトで活動する。文部科学省奨学金を得て、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程を修了。研究テーマは、「パフォーマンスの自己エスノグラフィ」と「国際的なアートコラボレーションと共同制作」。
アート、リサーチ、コミュニティとの活動を融合する複合領域的な集団「Salikhain Kolektib」のメンバー。2022年に、Salikhain Kolektib は「グッドスクール共同研究」の一員として、ドイツ・カッセルで開催された「ドクメンタ 15」に参加した。2023年からは、『宇宙船イン・ビトゥイン号の窓』（作・演出：岡田利規）の出演者として、チェルフィッチュとともに、国内外をツアー。ドラマトゥルクとして参加した公演には、フィリピン教育演劇協会（PETA）と京都の演劇ユニット・BRDGのコラボレーション『Sari-Sali: Portal Cafe』（マニラ・2024）がある。主な映画出演には、ラヤ・マーティン監督の『How to Disappear Completely』（ニューヨーク近代美術館・2017、ロカルノ国際映画祭・2013）と『Now Showing』（カンヌ国際映画祭監督週間・2008）がある。



撮影：Nanami Maeda

温 又柔 Yu-Ju Wen

小説家。1980年、台湾・台北市生まれ。両親とも台湾人。幼少時に来日し東京で成長する。2009年、「好去好来歌」で第33回すばる文学賞佳作を受賞し作家デビュー。『台湾生まれ日本語育ち』（2015、白水社）で第64回日本エッセイスト・クラブ賞（2016）、「文学作品を通じて多文化共生社会に貢献した」として文化庁より長官表彰（2019）、『魯肉飯のさえざり』（2020、中央公論新社）で第37回織田作之助賞受賞（2020）。他の小説集に『来福の家』（2011、集英社）、『空港時光』（2018、河出書房新社）、『永遠年輕』（2022、講談社）、『祝宴』（2022、新潮社）、『恋愛往事』（2025、集英社）、エッセイ集に『私のものではない国で』（2023、中央公論新社）など。



撮影：朝岡英輔

📖 Echoes Now

「Echoes Now」は、2024年に始動したKYOTO EXPERIMENTが期待する次代のキュレーターとアーティストをショーケース形式で紹介するパフォーマンス・プログラム。活動分野において異なる背景を持つ3名のキュレーターによるプログラムは、注目すべき実験的な表現を展開するアーティストとその作品を紹介する。プログラム名は、これらのアーティストの表現やキュレーターの思考が国内外のアートシーンにコダマすることを期待して「Echoes」、そして「これから期待の」表現であると同時に、「Now」紹介されるべきであろうという、次代の熱量を代弁している。



© 竹内敦子(XS)

10.7（火）18:00 ★

10.8（水）18:00

★ポスト・パフォーマンス・トーク

会場📍 京都芸術センター フリースペース、講堂

上演時間📍 130分（予定）

* 3 演目上演／途中転換休憩あり

キュレーター：川口万喜、堤 拓也、和田ながら

📍 川口万喜プログラム

小出麻代・小林 颯・高橋久美子『お loqu さん』[パフォーマンス]

📍 堤 拓也プログラム

倉知朋之介『SOFTBOYS ～だってまだまだ今来たばっか！～』[パフォーマンス]

📍 和田ながらプログラム

レウ・ウィジェ + 和田ながら『マッサージ X ゴシップ』[演劇・ダンス]

キュレーター プロフィール

川口万喜 Maki Kawaguchi

成安造形大学芸術計画クラスを自主退学後、4年間農業に従事。2009年より大阪・中之島にあるコミュニティスペース「アートエリアBI」の事務局スタッフとして、国内アーティストの展覧会、音楽ライブ、パフォーマンス公演などに携わる。2013年、同施設の事務局を法人化し、理事兼事務局長を2023年まで務める。同年2月より京都市京セラ美術館事業企画推進室に広報担当として勤務。個人での活動として、多分野にわたるアーティストとの協働、展覧会の企画運営等を行う。



堤 拓也 Takuya Tsutsumi

1987年生まれ、関西拠点。キュレーター、グラフィックデザイナー。2019年アダム・ミツキエヴィチ大学大学院カルチュラル・スタディーズ専攻修了。展示空間の構成だけに限らず、パフォーマンスを含む1回的な体験機会を生み出す一方で、アジアを中心とした非制度的な実践に関心がある。これまでの主なディレクション／キュレーション実績に、シェアミーティング2「つぎつぎに（あつまっては）なりゆくいきほひ」（滋賀、2025）、MEET YOUR ART FESTIVAL 2024「SSS: Super Spectrum Specification」（東京）、山下拓也個展「闇が抱える光：熊、ムンク、チーズバーガー、他」（台北、2023）、国際芸術祭「あいち 2022」（愛知）など。山中 suplex 共同プログラムディレクター。ICA 京都プログラム・ディレクター／京都芸術大学准教授。



Photo by Kai Maetani

和田ながら Nagara Wada

京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）芸術学部映像・舞台芸術学科卒業、同大学大学院芸術研究科修士課程修了。2011年2月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。演技という行為に強い関心を持ち、テキストやモチーフを接写するように読み解いていくことで、作品ごとに固有の演技の文法の構築をめざしている。美術、写真、建築、音楽、彫刻、ダンスなど、異なる領域のアーティストとも演劇を媒介に対話し、協働作業による作品制作に積極的に取り組む。2018年より多角的アートスペース・UrBANGUILD ブッキングスタッフとして俳優にフォーカスしたパフォーマンスシリーズ「3CASTS」を企画。2020年よりNPO法人京都舞台芸術協会理事長。2025年度セゾン文化財団セゾン・フェロー！。



Photo by Yuki Moriya

[川口万喜プログラム]

小出麻代・小林 颯・高橋久美子 [大阪・京都・愛媛、東京（日本） | パフォーマンス]

お loqu さん

上演時間 30 分（予定）

言語 日本語・英語



「お loqu さん」は、3 人のアーティストが会うことから始まった。「お loqu さん」は人間でも、モノでもない。強いて言えば 3 人が生み出す状況である。

関西には人間ではないものに「お」や「さん」をつける習慣があり、とりわけ京都ではよく耳にする。「お豆さん」「お稲荷さん」「おひさん」など、これらは宮中の「御所ことば」が起源と言われ、寛容で温かみのある表現として今でも親しまれているが、日本語には、漢字、ひらがな、カタカナの 3 つの文字を使い分け、外来のものを文字で区別して混ぜずに受け入れる性質がある。

「お」と「さん」の間に決して入ることはないラテン語の「話す、言う」を語源とする loqu を当てはめた「お loqu さん」は、小出麻代・小林颯・高橋久美子が言葉によって敷かれる境界と、その混ざる地点に生じるなにかを覗き見る試みである。

キュレーターコメント

人と場所との接点に生じる言葉を掬い上げる小出麻代、装置と映像を通じて新たな語りの形を模索する小林颯、音と意味のはざままで文字と声で創作する高橋久美子。言葉を扱いながらも異なるアプローチで活動する 3 人のコラボレーションは、3 つの表現がそれぞれ独立しながらもセッションを重ねることで互いに影響を受け、混ざり、反発し、溶け合いながら、存在する。それはさまざまな言語やツールのはざままで変容する言葉のありようとも似ているかもしれない。

小出麻代 Mayo Koide

美術家。1983年大阪府生まれ。2009年京都精華大学大学院芸術研究科芸術専攻修了。作品制作を通して、大きな声で語られてきた「歴史」の中に埋もれる、個別具体的な要素の重なりを、特に人と場所との結びつきの観点から解きほぐすことに興味を持つ。他者や自身の言葉・オブジェクト・写真や映像などの要素を発表場所の持つ特性と重ね合わせ、生じる光や音、空気の揺れなども含めたインスタレーション作品を制作する。近年の展覧会に、個展「尼崎市文化未来奨励賞受賞記念展 声声が灯して The polyphony of our narratives」（尼崎市総合文化センター旧結婚式場、兵庫、2023）など。



小林 颯 hayate kobayashi

1995年北海道生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。2020年から2024年まで、江副記念リクルート財団スカラシップを経てドイツ・ベルリンへ渡独。2024年にベルリン芸術大学大学院アートアンドメディア科を修了。装置と映像を通じて、エクソフォニー（「母語の外にある状態一般」の意）の新たな語りの形を再考している。近作では、翻訳とアイデンティティの観点から、アジア系移民のアイデンティティの流動性を主題に扱う。主な個展に「ポリパロール」（アートセンター BUG、2024）など。Forbes 30 Under 30 Asia 2022 The Arts 選出。



高橋久美子 Kumiko Takahashi

作家・作詞家・農家。詩、エッセイ、小説、絵本など創作活動が続ける。バンドで、ドラマー・作詞家として活動後、2012年より作家に。現在は東京と愛媛の二拠点で生活し、愛媛では農業をしている。近著に、エッセイ集『いい音がする文章』（ダイヤモンド社、2025）、『わたしの農継ぎ』（ミシマ社、2024）、小説集『ぐるり』（筑摩書房、2021）など。アーティストへの歌詞提供も多数。



[堤 拓也プログラム]

倉知朋之介 [東京（日本） | パフォーマンス]

SOFTBOYS 〜だってまだまだ今来たばっか！〜

SOFTBOYS: Datte Mada Mada Ima Kita Bakka!

上演時間 25 分（予定）

言語 日本語・英語字幕

日常生活や集団の中で脈絡なく発生するマイクロな「可笑しさ」や「間抜けさ」に着目し、それを引き起こす事物の振る舞いや状況を、主に映像インスタレーションとして展開してきた倉知朋之介。それらの実践は、直接的に「身内ノリ」や「悪趣味文化」、「ローカルチャー」であることを惜しげもなく曝け出す。TV ドラマや映画、ミュージックビデオ、SNS 上のミーム動画といった素材が、倉知や彼の友人たちの身体を通して誇張・模倣・再統合された表現は、結果的に 90 年代後半生まれの「限定的な了解に基づく振る舞い」が可視化できるようにアウトプットされている。

そういった過剰で即興的な演出は今回、映像という反復可能なメディアの枠を越え、ライブパフォーマンスという形式に昇華される。男性たちが自分の身体性や、居心地の悪さを引き受け、それらを自覚的に語り直すという試みは、「内輪のコード」というものを凌駕し、「男性であること」そのものを再演しながら問い直すような実践となるかもしれない。

キュレーターコメント

倉知朋之介はシャイである。カメラに向かってであれば、あんな仕草や、こんな顔、そんな声を発するというのに、カフェで対面しているその細身の男性は、自身のアルゴリズムによって生成された「発見タブ」の画面を恥ずかしそうに見せてくる。とはいえ「これめっちゃ好きなんですよ」と語るアカウントを純粋におもしろいと思っているわけではなく、逆にその「すべっている」ところを友人たちと再演・脚色してストーリーにあげてしまう（／Linkin Park・In the End）。もしこの「身内ノリ」が拡張してその場を正当に占有する可能性があるのなら、それはおそらく映像表現ではなく、舞台空間であると思われる。

倉知朋之介 Tomonosuke Kurachi

倉知朋之介は、エンターテインメントへの批評性のもと自らが主演・演出を手がけた映像インスタレーションを制作している。TV ドラマ、MV、あるいは映画といった広く知られた娯楽を引用して、真似るという原初的な誇張により笑いを巧みに引き起こす。日用品を取り入れた舞台装置や衣装を即席的につくり、日常世界を愉快的なショーへと変容させて、自らが即興的にリズミカルな音を発することで意味／無意味のおかしさを暴露していく。倉知は笑いを基底とした芸術表現によって、近代以降に生まれた娯楽や人間性を実践的に自問する。



[和田ながらプログラム]

レウ・ウィジェ + 和田ながら [パル、ジョグジャカルタ（インドネシア）・京都（日本） | 演劇・ダンス]

マッサージXゴシップ

massageXgossip

上演時間 60 分（予定）

言語 日本語、英語、インドネシア語（日本語・英語字幕あり）



顔を合わせてから 30 分も経っていない他人に、「ここ痛いですか？ 寝不足ですね」と足の裏のツボをぐっと押され、悲鳴をあげる。「ちょっと聞いてよ、ここだけの話なんだけどさ」という親しい友人の語り出しに、身を乗り出し顔を寄せ声をひそめる。

マッサージとゴシップという、一見するとまったく関係のなさそうなこのふたつを、人間社会における「他者に触れるための技術」として遊戯的に接続してみたら？ インドネシアの振付家 レウ・ウィジェと日本の演出家 和田ながらは、バンコク、台北、ジョグジャカルタ、城崎と、アジアの複数の都市を共にめぐりながらリサーチと対話を深めてきた。異なる言語／文化／芸術的背景をもつふたりのアーティスト、そしてふたつのトリッキーなモチーフ。この偶然の重なりあいには、いったいどんな身体と語りを生成するだろうか。

キュレーターコメント

レウ・ウィジェとは昨年の夏に台北パフォーミングアーツセンターが主催する ADAM Artist Lab で出会った。ダンスと演劇、インドネシアと日本。異なる文脈にいた私たちはしかしすぐに意気投合し、モチーフを思いつき、その奇妙さを面白がっていた。進化の過程で毛繕いが言語に移行していったとき、猿たちはゴシップを喋っていた、という人類学者ロビン・ダンバーの仮説を知ったのはその後だ。毛繕いがマッサージの源流であり、ゴシップが言語の起源なのだとしたら、私たちは思いがけずコミュニケーションという人間の営為の根に手を伸ばしていたということか。英語でもどかしく不器用にやりとりしながら。

レウ・ウィジェ Leu Wijee

インドネシアの中央スラウェシ州バリギ生まれ。パルとジョグジャカルタを拠点とする、独学のインドネシア人アーティスト、振付家、ダンサー。創作活動では、ミックス・スーリミックスのコンセプトを探求し、振付的思考を始点に、感覚、空間、音、物など様々な要素を取り入れ、交差させる。彼にとって身体が第一のメディアであるが、動くものはすべて、創作に共鳴するものと考えている。近年は、BIPAM（バンコク国際舞台芸術ミーティング、2025）、ADAM（Asia Discovers Asia Meeting for Contemporary Performance）の「Kitchen」（台北、2023）と「Artist Lab」（バンコク・台北、2024）、インドネシア・ダンス・フェスティバルの「Kampana」（ジャカルタ、2022）と「Evening Performance」（同、2024）、「東京芸術祭 Farm-Lab Exhibition」（2021）など様々なプログラムやフェスティバルに参加している。キャリアを通じて、レウ・ウィジェの作品は、ブラックボックスの劇場、ギャラリー、伝統的な日本家屋、スタジオ、オンライン上、その他のオルタナティブな空間など、様々な場所で上演されてきた。また、ジェコ・シオンポ（2014 年～ 2019 年に協働）をはじめ、他のアーティストの作品にも参加・出演している。



Photo by Mio Ishida

📖 Super Knowledge for the Future [SKF]

📖 ロームシアター京都 “いま” を考えるトーク

リーディング+トーク

× KYOTO EXPERIMENT Super Knowledge for the Future [SKF] プログラム
『不可能の限りにおいて』 リーディング公演+トーク

10.18 (土) 16:00-19:00

会場：ロームシアター京都 ノースホール

言語：日本語

[リーディング公演]

『不可能の限りにおいて』

作：ティアゴ・ロドリゲス

翻訳：藤井慎太郎

演出：今野裕一郎 (バストリオ)

出演：坂藤加菜、佐藤駿、砂川佳代子、中條玲、橋本和加子、本藤美咲

音響：SKANK/ スカンク



バストリオ
Photo by Ralph spieler

[トーク]

ゲスト：桑名 恵 (近畿大学国際学部教授)、藤井慎太郎 (早稲田大学文学学術院教授)、バストリオ

「観て、考える」ことから見つめる

演劇の可能性、世界の紛争地域の今

『不可能の限りにおいて』は、ポルトガル出身の劇作家、演出家でアヴィニョン演劇祭（フランス）のディレクターを務めるティアゴ・ロドリゲスが、赤十字国際委員会と国境なき医師団のメンバーら 30 人との対話を重ねて創作した戯曲だ。紛争地域で人道支援を行う彼らの孤独や苦悩を描き話題となった本作を、今回はリーディング公演*（日本語版）として上演。今野裕一郎が主宰するパフォーマンス・コレクティブ「バストリオ」が演出・出演を手がける。

難民キャンプをどう運営するか、生と死の耐えがたい決断にどう向き合うか。世界を変えられない無力さに、絶望の淵で見た人間の尊厳に何を思うか——。舞台上に現れるパフォーマーが複数の証言者となり、“不可能”な世界に従事する人々の声をリレーのようにつないでいく劇中では、実在する場所や人物の名前は明かされない。私たちは想像力の限りを広げて物語を手繰りよせ、目の前に立ち上げていくこととなる。

終演後は演出家や日本語版の翻訳者、人道支援の専門家らによるトークを開催。テーマは戯曲を味わう醍醐味から、紛争地域や国際支援の現状まで。「舞台を観た後」から豊かに広がっていく、対話と思考の時間を楽しんでほしい。

*基本的には舞台装置を設けず、俳優が台本を手にして演劇をする公演（今回はさまざまな演出も行われる）。

主催：KYOTO EXPERIMENT、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市
助成：令和7年度 文化庁 文化資源活用推進事業

バストリオ The Busstrio

パフォーマンス作品を制作するコレクティブ。生きていく中で出会うビビットな瞬間を小さなシーンへと立ち上げるクリエイションを行う。いくつもの行為・出来事・モチーフをバラバラのまま配置する上演は、音楽的なグルーブを帯びながら“名付けようのない生”を描き出す。存在そのものを肯定するような祝祭的な時間は、観客の想像力を喚起し世界を捉える視点に奥行きをもたらす。第14回せんがわ劇場演劇コンクールにてグランプリほか3冠受賞。



📍 プレイベント

トーク

KEX2025 キーワードよもやま夜話

9.18 (木) 19:00-20:30

会場：BnA Alter Museum

ゲスト：小山田徹（京都市立芸術大学理事長・学長）、吉岡 洋（美学者）

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

料金：1,000 円（1 ドリンク付き）



小山田徹

今年のフェスティバルのキーワード「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」について、美術家の小山田徹と美学者の吉岡洋が徹底的に語り合う！ 菌類が生態系に果たしている独自の役割、俳句という削ぎ落とされた詩の形式、偶然の出会いが生み出すグルーヴ……。会期が始まる直前、未知なる作品たちに向かっていく準備運動にもピッタリなスペシャル対談に、ぜひ立ち会って。



吉岡 洋

📍 『墓地の上演』プレイベント

レクチャー

旧真田山陸軍墓地 見学&レクチャー

9.27 (土) 13:30-16:00

会場：旧真田山陸軍墓地

案内・レクチャー：NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会

料金：無料

*雨天決行。荒天の際はイベント内容を変更または中止する場合があります。フェスティバルの公式 X アカウントでお知らせします。



提供：NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会

Shows で上演する筒井潤『墓地の上演』の舞台である旧真田山陸軍墓地を実際に訪れ、案内ツアーとレクチャーを実施する。旧真田山陸軍墓地は、1871 年に日本最古の陸軍埋葬地として設置されて以来、国家の歴史と個人の記憶がさまざまに折り重なりながら運用されてきた墓地であり、日本の近代史にとっても重要な現場だ。立ち並ぶ墓碑のひとつひとつの背景から見てくるものとは。現地の空気と共に体験を。

📍 ファイブ・アーツ・センターについて

トーク

10.4 (土) 13:00-14:30

会場：ロームシアター京都 パークプラザ 3 階 会議室 2

ゲスト：ジューン・タン（プロデューサー、ファイブ・アーツ・センター）

聞き手：堤 拓也（キュレーター、山中 suplex 共同プログラムディレクター）

言語：日本語、英語（逐次通訳あり）

料金：無料



アーティストやアクティヴィストら 13 名が所属し、国際的な活動で知られるマレーシアのコレクティブ、ファイブ・アーツ・センター。『トゥアの片影』の演出をつとめるマーク・テとプロデューサーのジューン・タンもそのメンバーだ。ジューン・タンが語る本トークでは、キュレーターの堤拓也が聞き手となり、1984 年の発足以来、多彩な構成メンバーたちがどのように協働し活動を続けてきたのか、また今日の文脈におけるコレクティブの重要性などに迫る。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金



マーク・テ ワークショップ

ワークショップ

10.6 (月) 11:00-15:00 (休憩含む)

会場：ロームシアター京都 ノースホール

ファシリテーター：マーク・テ

対象：演劇活動に携わっている方（劇作家、演出家、プロデューサー、俳優など）

言語：英語（日本語逐次通訳あり）

料金：1,500 円



マーク・テ

歴史や政治に対して、アーティストは作品を通じてどのようにアプローチしているのか？ このワークショップでは、マレーシアの伝説的な英雄を題材にした『トゥアの片影』をはじめ、歴史的・政治的なモチーフを扱う作品を多く発表しているマーク・テの思考と実践がシェアされる。長期にわたる広範で綿密なリサーチに基づく作品制作のプロセスとは。演出家、劇作家、俳優、プロデューサーなど、演劇の現場に関わっている人にぜひ参加してほしい。

主催：KYOTO EXPERIMENT、国際交流基金



「TOPOS：まなびあう庭としての芸術大学」共同企画

トーク

ターニャ・アル＝フリー アーティスト・トーク

10.6 (月) 18:00-19:30

会場：京都市立芸術大学 講義室Ⅰ（C棟Ⅰ階）

ゲスト：ターニャ・アル＝フリー

聞き手：藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター）

言語：日本語、英語（逐次通訳あり）

料金：無料



ターニャ・アル＝フリー
Photo by Nour Annan

本フェスティバルで『電力と権力を探して』を上演するターニャ・アル＝フリーは、集団的な記憶や連帯感の形成をテーマに、観客の参加によって変容していくインタラクティブなインスタレーションやパフォーマンスを制作するアーティストだ。作品が国際的に高く評価され、ディレクターを務めるバード大学の「人権と芸術センター（Center for Human Rights and the Arts、略称:CHRA）」でディレクターとして教育にも深く関わっているアル＝フリーに、国家権力や強制移住、国境などをテーマにこれまで行ってきた創作について聞く。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
助成：令和7年度 大学における芸術家等育成事業

「TOPOS：まなびあう庭としての芸術大学」共同企画

トーク

ズィヤード・アブー・リーシュ トーク

10.9 (木) 18:00-19:30

会場：京都市立芸術大学 講義室Ⅰ（C棟Ⅰ階）

ゲスト：ズィヤード・アブー・リーシュ

聞き手：藤田瑞穂（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター）

言語：日本語、英語（逐次通訳あり）

料金：無料



ズィヤード・アブー・リーシュ

ターニャ・アル＝フリーと共に『電力と権力を探して』を創作し、出演も担うズィヤード・アブー・リーシュは、近代中東・北アフリカ（MENA）地域を専門とする研究者。本トークでは、レバノンにおける電力問題や中東における抵抗運動の研究を中心に、作品創作と研究とのつながり、また、ディレクターを務めるバード大学「人権芸術センター」のプログラムについてなど、アブー・リーシュの活動について聞く。

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
助成：令和7年度 大学における芸術家等育成事業

📖 バック・トゥ・バック・シアター ワークショップ

ワークショップ

「仕事の時の仕事についてじゃないおしゃべり」

10.7 (火) 18:00-20:00

会場：京都市内

ファシリテーター：イングリッド・フォーレント (『いくつもの悪いこと』演出)、

バック・トゥ・バック・シアター アンサンブルメンバー

言語：英語 (日本語逐次通訳あり)

料金：1,500 円



Photo by Jeff Busby

Shows で『いくつもの悪いこと』を上演するバック・トゥ・バック・シアターが、テキストと身体を使った、カンパニーの即興的な手法を紹介するワークショップを開催する。その出発点は、「仕事場で交わされる、仕事についてじゃないおしゃべり」。参加者は、『いくつもの悪いこと』の作品内容と表現形式をもとに、その創作のプロセスに触れていく。みんなの話を聞いて、身体を動かし、実験する中で、仕事にも作品にも関係のないおしゃべりを楽しんでみてはいかが？

📖 アダム・キナー&クリストファー・ウィレス アーティスト・トーク

トーク

10.21 (火) 19:30-20:30

会場：京都市立芸術大学 講義室 5 (C 棟 3 階)

ゲスト：アダム・キナー&クリストファー・ウィレス

聞き手：藤田瑞穂 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター

／プログラムディレクター)、KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

言語：日本語、英語 (逐次通訳あり)

料金：無料



撮影：吉本和樹 提供：京都市立芸術大学

ひとりのパフォーマーがひとりの観客をナビゲートし、図書館という空間を味わうように旅するパフォーマンス『MANUAL』。本作を手がけたカナダ拠点のアーティスト、アダム・キナーとクリストファー・ウィレスに、この親密でパーソナルな作品がどのように生まれたのか、世界各地の公共図書館での上演の経験などをたっぷりと語ってもらうアーティスト・トークを実施する。ふたりは日々の創作で重要視している「聴くこと」をどのように捉え、世界を感覚しているのだろうか？

主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学

📖 ラストスパート！ディレクターズ・トーク&きのこ DJ ナイト！

トーク&パーティ

10.22 (水) 19:00-22:00

会場：BnA Alter Museum

トーク：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

DJ：石川琢也 (研究者／エクスペリエンスデザイナー／ディレクター)

料金：1,000 円 (1 ドリンク付き)

共同アーティスティック・ディレクターの川崎陽子と塚原悠也が、今年のプログラムについてあらためてオープンに語り合うトークイベント。フェスティバルの最後の週末に臨む気分がすっかり高まったあとは、さまざまなイベントのディレクションを手掛けてきた石川琢也が古今東西のサウンドをうならせるパーティへ！共生、分解、発酵、毒、健康。いまだ多くの謎に満ちているにも関わらず人類を強烈に魅了しつづける「きのこ」縛りの DJ プレイを楽しんで。

美術家 遠藤薫トーク「出現型制作の方法論」

トーク



撮影：西岡心平

10.26（日）12:30-14:00

会場：京都市立芸術大学 I-103 彫刻 / 学部・修士制作室

ゲスト：遠藤 薫

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティスティック・ディレクター

料金：無料

沖縄や東北をはじめ国内外のさまざまな土地を訪れ、歴史や政治と生活の関係を探りながら工芸的な視点で作品制作を行うアーティスト、遠藤薫のトークを開催する。それぞれの地域固有の歴史を読み解いていくとき、遠藤自身の身体感覚はどのような軌跡をたどっているのだろうか？これまでの作品に通底するアジア地域の文脈やパフォーマティブな側面を深掘りしていくなかで、将来の制作アイデアについても話が広がっていくかも。

協力：京都市立芸術大学彫刻専攻金氏研究室

批評プロジェクト 2025

公募



C.T.T. 村川拓也 演劇版『テニス』の試演 撮影：長谷川慎也

メンター：梅山いつき（演劇研究者）

応募締切：11.10（月）23:59

対象演目：村川拓也 舞台版『テニス』

実験的な舞台芸術作品の批評・評論を学ぶプロジェクト。参加要件は、対象演目の舞台版『テニス』を鑑賞し、レビューを書いて応募すること（参加無料）。審査を経て選出された応募者（若干名）は演劇研究者の梅山いつきによる個別指導を受け、内容をブラッシュアップ。完成原稿は英語への翻訳も行い、日英共に KYOTO EXPERIMENT のウェブサイトに掲載される。また、多くの劇評が集まる「紙背」WEB にも同時に掲載。芸術批評やライティングを学んでみたい人はぜひ挑戦を！

助成：クリエイター支援基金

協力：紙背



📖 KYOTO EXPERIMENT × 国際交流基金「Sequence」

KYOTO EXPERIMENT は、独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation、JF）との共同事業として「Sequence（シーケンス）」を2025年度より開始することをお知らせします。

「Sequence」は、ASEAN 地域と日本の舞台芸術分野におけるアーティストおよび観客の人的交流による次代の人材育成を目的とした事業で、2025～2027年の3年間にわたり実施します。軸となるのは、日本とASEAN地域の次代を担うアーティストのインキュベーション・プログラム、ASEAN地域を拠点とするアーティストによるパフォーマンス作品の招聘公演および交流プログラム、ASEAN地域と日本のアーティストによる国際共同制作プログラムの3つです。

近年のKYOTO EXPERIMENTでは、アジアの同時代のアーティストによる実験的舞台芸術作品の紹介や、日本のアーティストとの共同制作に注力してきました。複数年度にわたる本事業の展開のなかで、よりアジア地域を起点とした芸術表現における協働の可能性を希求していきます。

「Sequence」には、ひとつの大きな物語を語る／作るのではなく、断片的なシーンを積み重ねることで、これからのASEAN地域と日本における舞台芸術の展開を作っていく、という意を込めています。

日本とASEAN地域を含むアジア地域には、非常に多様な文化とさまざまな社会・政治背景があります。本事業では、それらをまとめるような大きな物語を作ることよりも、大きな物語からはこぼれ落ちてしまう、断片的かもしれないひとつひとつのものごとや視点をすくいあげながら、交流とつながりを深めていくことにフォーカスしていきます。複数年にわたる「Sequence」が展開するなかで、日本とASEAN地域を含むアジア地域の文脈を起点として捉えなおし、その視点からの舞台芸術における事象や考えをつなぐことで、次代の人材を育成していくことを目指します。

2025年度は、本事業の枠組みとして、下記3プログラムを実施します。

- ・マレーシアの現代演劇を代表する演出家、マーク・テによる最新作『トゥアの片影』上演およびトーク、ワークショッププログラム（詳細はp.15、33、34）
- ・日本、フィリピン、台湾のアーティストによる『クルージング:旅する舌たち』国際共同制作（詳細はp.24）
- ・日本、タイ、東南アジアの次代を担うアーティストのインキュベーション・プログラム「Shifting Points」
フィールドワーク期間：10.19（日）-10.26（日）
- ＊期間中にトークイベントを実施（詳細はp.41）

📖 国際交流基金「次世代共創パートナーシップー文化のWA2.0ー」

独立行政法人国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。

日本ASEAN友好協力50周年（2023年）を契機に、日本とASEANの次世代の交流促進と人材育成を目的とする包括的な人的交流事業「次世代共創パートナーシップー文化のWA2.0ー」を、今後10年間にわたり集中的に実施していきます。このプロジェクトは、2013年から約10年間にわたって数多くの交流事業をおこなった「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を発展的に継続するものです。日本語パートナーズ事業と、双方向の知的・文化交流事業を軸に、心と心のふれあいを通じて、多層的な人的ネットワークの強化や、対象地域と日本との将来にわたる強い信頼関係の構築を目指しています。

国際交流基金公式ウェブサイト：<https://www.jpf.go.jp/>

WA2.0ウェブサイト：<https://www.jpf.go.jp/j/project/special/bunkanowa2/index.html>

📖 フリンジ：More Experiments

フェスティバル開催期間中に京都で発表される作品を一挙に紹介する「フリンジ：More Experiments」。演劇・ダンス・音楽・朗読・パフォーマンス・展示など、ジャンル不問の公募で集まった作品を紹介します！

*参加団体は8月中旬にウェブサイトでお知らせします。

10.1（水）-10.31（金）

会場：京都府下各所



📖 ミーティングポイント

「ミーティングポイント」は、フェスティバルと観客をつなぐ交流拠点&インフォメーションセンターです。四条河原町や木屋町にほど近いアートホテル「BnA Alter Museum（ビーエヌエー オルター ミュージウム）」とロームシアター京都の中庭「ローム・スクエア」の2拠点が会期中にオープンします。いずれの会場でも、マガジンやフライヤーの配布、オリジナルグッズの販売を行うほか、それぞれの場所ならではの企画を実施します。BnA Alter Museumでは、SKFのイベントも開催。さらに、Bar タイムには、この期間限定のオリジナルドリンクもお目見えするので、観劇後にもぜひ立ち寄りください。ほかにも、アーティスト関連書籍が並ぶライブラリーや、来場者同士で言葉を交わせる「交換ノート」も設置。気ままにロゴやひとことを綴って、誰かとゆるやかにつながってみてください。ローム・スクエアでは、観劇前の視点をひらくトークの開催や、観光ガイドには載っていない京都の魅力案内も行います。どちらの会場にも、フェスティバルに関わるメンバーも訪れます。観劇の前後や、まち歩きの途中に、ぜひお越しください！

*2会場ともに入場無料。

📖 ミーティングポイント BnA Alter Museum

〒600-8024 京都市下京区天満町267-1 BnA Alter Museum 1階
(阪急電車「京都河原町」より徒歩6分。京都市バス「河原町松原」より徒歩1分。)

開場日時：10.4（土）-10.26（日）11:00-26:00

*18:00-26:00はBar タイム（要1ドリンクオーダー / LO 25:30）

「泊まれるアート」をコンセプトに、クリエイティブ集団「BnA」が手がけた10階建てのアートホテル。16組のアーティストが手がけた31部屋に加え、ギャラリーやショップ、カフェ、バーもあり、多彩な展覧会やイベントを展開中。関西のカルチャー発信のハブとしても注目されています！フェスティバル中に宿泊すると、うれしい特典も。



ミーティングポイント BnA Alter Museum
Photo by Yuki Moriya

📖 ミーティングポイント ローム・スクエア

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 ロームシアター京都

開場日時：会期中の毎週末土日 12:30-18:00



ミーティングポイント ローム・スクエア

感想シェアカフェ

「感想シェアカフェ」とは、Shows プログラムの上演後に実施している対話型のイベント。鑑賞体験だけではなく、より深い作品の楽しみ方を体験いただくための企画です。

同じ作品を鑑賞していても、実のところ、その体験は人それぞれに違います。作品を鑑賞した人が終演後に集まり、自分が感じたことを言葉にして語ったり、作品とともに鑑賞した人の話にじっくり耳を傾けたりすることで、互いに新たな気づきや違った視点、発見を「分かち合う＝シェアする」ことを目的としています。「面白そうだな」「時間があるから参加してみようかな」と思った方は、ぜひご参加ください。「言葉にまとまるか不安…」「他の方の感想を聞いてみたい」という方も大歓迎です。予約優先ですが、当日の飛び入り参加も可能です。



実施演目

バック・トゥ・バック・シアター『いくつもの悪いこと』 10.5（日）15:30 の回

マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター『トゥアの片影』 10.5（日）17:30 の回

村川拓也 舞台版『テニス』 10.11（土）14:00 の回

倉田 翠 / akakilike『病癒えし者の着色された魚への聖なる感謝の歌』 10.17（金）18:30 の回

マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス『私はユニコーンではない』 10.25（土）18:00 の回

Jang-Chi × 李 銘宸（リー・ミンチェン）× ネス・ロケ × 温 又柔『クルージング：旅する舌たち』 10.26（日）15:00 の回

ブックフェア

10.4（土）-10.26（日）

会場：京都岡崎 蔦屋書店

参加アーティストの関連書籍や、フェスティバルのキーワード「松茸や知らぬ木の葉のへばりつく」をテーマに集めた KYOTO EXPERIMENT ブックフェアを「京都岡崎 蔦屋書店」で開催します。

ここでしか購入できない、KYOTO EXPERIMENT オリジナルグッズも販売します。よりフェスティバルを楽しむために、観劇前後にぜひお立ち寄りください。



Photo by Yuki Moriya

🏨 パートナーホテル

KYOTO EXPERIMENT とパートナーシップを結んでいるホテルです。
会場からの交通の便もよく、観劇や京都観光を夜まで楽しんだ後は宿で
ゆっくり過ごせます。

ホテルに宿泊するお客様には、当日公演会場の受付でご提示いただくと、
Shows のチケット料金が¥500 引き（当日券のみに適用）になる、もし
くは「KYOTO EXPERIMENT ステッカーセット」がもらえる、パートナー
ホテル利用者限定えらべるクーポンを提供します。

- ・ 河岸ホテル
- ・ THE REIGN HOTEL KYOTO（ザ・レインホテル京都）
- ・ node hotel（ノードホテル）
- ・ HOTEL ANTEROOM KYOTO（ホテル アンテルーム 京都）
- ・ BnA Alter Museum（ビーエヌエーオルターミュージアム）
- ・ MAGASINN KYOTO（マガザンキョウト）



BnA Alter Museum
Photo by Tomooki Kengaku



HOTEL ANTEROOM KYOTO

関連プログラム

2025 年度 舞台芸術プロデュース講座～演劇・ダンス編～

地域の舞台芸術のプロデュース／企画制作領域の専門人材の育成プログラム。

強力な講師陣を迎え、舞台芸術プロデュース、舞台制作、マネジメントに関するレクチャーとワークショップを開催します。演劇やダンスをプロデュースする仕事とは、企画はどのようにつくられていくのかなど、社会と舞台芸術をむすぶ制作者たちのシゴトのいろはから、舞台芸術における「プロデュース」のさまざまなカタチを知り、未来の舞台芸術について考える講座です。

2025 年 11 ～ 12 月予定

会場：ロームシアター京都 パークプラザ 3 階 会議室、京都芸術センター ほか

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、KYOTO EXPERIMENT、NPO 法人京都舞台芸術協会、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、京都市

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

Shifting Points

バンコク国際舞台芸術ミーティング（BIPAM）、KYOTO EXPERIMENT および独立行政法人国際交流基金（JF）が共同で主催する、日本、タイ、東南アジアの次代を担うアーティストのインキュベーション・プログラム。公募にて選出された、多様なバックグラウンドで舞台芸術を創作する新進気鋭のアーティストが参加し、日本やタイをはじめとするさまざまな場所でのフィールドワークを通して互いの学びを共有しながら、自身の思考や実践方法を拡張していきます。

2025 年度は、参加アーティストが KYOTO EXPERIMENT 開催期間中に京都に滞在し、フィールドワークとパブリック・プログラムを行います。

参加アーティスト（ファーストネーム・アルファベット順）

アンナスタシャ・フェリナ（インドネシア）

玉井秀和（日本）

ホアン・アイン・グエン（ベトナム）

ポンサトーン・プッタコート（タイ）

タナポン・アッカワタンユー（タイ）

内田結花（日本）



フィールドワーク期間：10.19（日）-10.26（日）

*ワークショップ等のイベントも開催予定。詳細はウェブサイトにて発表します

パブリック・トーク

出演：参加アーティスト

聞き手：KYOTO EXPERIMENT 共同アーティストティック・ディレクター、シリー・リュウパイブーン（BIPAM アシスタント・アーティストティック・ディレクター）

日程：10.25（土）11:00-12:00

会場：京都芸術センター ミーティングルーム 2

料金：無料

主催：KYOTO EXPERIMENT、BIPAM、国際交流基金

*Shifting Points は、KYOTO EXPERIMENT と国際交流基金による共同事業「Sequence」のプログラムです。

提携プログラム

京都学生演劇祭 2025

いかに舞台？いかにおもしろい？

京都学生演劇祭、15年目のコンセプトは【HOW?】。ありかたを問い、違いを味わう。学生の演劇文化において、あるいはより普遍的に、それが求められる時代です。今年はワークショップや交流の機会を多数用意。全国学生演劇祭に推薦する団体の選出基準も、全10団体の協議により新たに決めます。そのはてにいかなる景色が編み出されるのか。10の表現、西部講堂にてお立ち会ください。

10.10（金）-10.13（月・祝）

会場：京都大学西部講堂

主催：京都学生演劇祭実行委員会

共催：西部講堂連絡協議会

提携：日本学生演劇プラットフォーム、KYOTO EXPERIMENT



オヒアレファ『幽在』（京都学生演劇祭2024
KYOTO EXPERIMENT 賞受賞作品／撮影：川崎麻琳）

豊岡演劇祭 2025

2020年に始まった豊岡演劇祭は、観光やまちづくりと連動した回遊型の演劇祭です。劇場はもちろんのこと、温泉街、海岸、高原、神社に伝わる木造の農村舞台など、いたるところを舞台として活用して、さらに年々、思いもよらない場所が演劇祭の会場として加わっています。上演プログラムは海外からの参加アーティストをはじめ、国内外からアーティストやストリートパフォーマーなど約80団体が参加します。

9.11（木）-9.23（火・祝）

会場：豊岡市、養父市、香美町、朝来市、新温泉町

主催：豊岡演劇祭実行委員会



ニュー・ブランシュ KYOTO in Residence

パリのニュー・ブランシュから着想を得て毎秋開催されるニュー・ブランシュ KYOTO。15回目を迎える本年は、*** in Residence Kyoto とのコラボレーションにより、特別バージョンとして開催します。フランスのアーティストが約1箇月京都に滞在し、その創作活動の成果を御覧いただく、アーティスト・イン・レジデンスに焦点を当てた初の試みです。市内の個性豊かなレジデンス施設も一般公開されます。

9.27（土）-10.4（土）

*開催日時は会場により異なります

会場：京都駅ビル、関西日仏学館、ヴィラ九条山、マガザンキョウト、STUDIO MONAKA 等、市内各所

主催：京都市、関西日仏学館



ニュー・ブランシュ KYOTO 2024 - 物見「Monomi」
会場：Bridge Studio

📍 OKAZAKI PARK STAGE 2025

岡崎地域のみなさんが活躍する「ローム・スクエアライブ」や、公募団体による「オープンコールステージ」、ゆるやかに集いあう「ちっちゃい焚き火(薪ストーブ)を囲んで語らう会」まで、どなたでも気軽に楽しめる催しがいっぱいです。

9.27 (土) - 10.26 (日)

会場：ロームシアター京都 ローム・スクエア

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

協力：京都市岡崎いきいき市民活動センター



Photo by Toshiaki Nakatani

📍 ゆうめい 10 周年全国ツアー公演『養生』

第 32 回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞した話題作。原体験をもとにショッピングモールの夜勤現場を舞台に描いた本作は、時間と空間が交錯しながら、選択肢の少ない現代を生きる人々の姿を鋭くもユーモラスに映し出します。第 68 回岸田國士戯曲賞を受賞、読売演劇大賞でも空間演出が絶賛された池田亮が、ゆうめい結成 10 周年の集大成として、戯曲・演出・美術をさらに進化させた新たな代表作『養生』を上演します。

11.1 (土) - 11.3 (月・祝)

会場：ロームシアター京都 ノースホール

主催：合同会社ゆうめい

共催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動）） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

公益財団法人全国税理士共栄会文化財団

ロームシアター京都 10 周年連携事業



📍 ダミアン・ジャレ×名和晃平『Planet [wanderer]』

世界で脚光を浴びる振付家ダミアン・ジャレと京都発の彫刻家名和晃平によるコラボレーション。2016 年にロームシアター京都で初演をむかえた『VESSEL』に続く作品で、人間が葦のように力と脆さ、調和と生存、破壊と進化の間で揺れ動く姿が表現されます。日本の彫刻家と欧州の振付家の共同作業ならではの、唯一無二の世界観を提示します。

11.8 (土) - 11.9 (日)

会場：ロームシアター京都 サウスホール



Photo by Rahi Rezvani

主催：ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市

共同招聘：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

劇場・音楽堂等機能強化推進事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

With the support of Dance Reflections by Van Cleef & Arpels

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ

ロームシアター京都 10 周年記念事業

会場

A: ロームシアター京都

／ミーティングポイント ローム・スクエア

京都市左京区岡崎最勝寺町 13

Tel 075-771-6051

- ・地下鉄東西線「東山駅」より徒歩約 10 分
- ・市バス 32、46 系統「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし



ロームシアター京都, Photo by Shigeo Ogawa

B: 京都芸術センター

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2

Tel 075-213-1000

- ・地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」22・24 番出口より徒歩約 5 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし



京都芸術センター, Photo by Nobutada Omote

C: 京都芸術劇場 春秋座

京都市左京区北白川瓜生山 2-116 京都芸術大学内

Tel 075-791-8240

- ・叡山電車「茶山・京都芸術大学駅」より徒歩約 10 分
- ・市バス 3、5、204 系統「上終町・瓜生山学園 京都芸術大学前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし（原付・バイクはご遠慮下さい）

D: 京都市左京東部いきいき市民活動センター

京都市左京区鹿ヶ谷高岸町 3-2

- ・地下鉄東西線「蹴上駅」より徒歩 15 分
- ・市バス 5、32、93、105、203、204 系統「東天王町」より徒歩約 5 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし

E: CLUB METRO

京都市左京区川端丸太町下ル下堤町 82 恵美須ビル B1F

- ・京阪「神宮丸太町駅」2 番出口直結
- ・市バス 65、93、202、204 系統「丸太町京阪前」より徒歩約 2 分
- ・駐輪場、駐車場なし



京都芸術劇場 春秋座, Photo by Toshihiro Shimizu

F: THEATRE E9 KYOTO

京都市南区東九条南河原町 9-1

Tel 075-661-2515

- ・JR「京都駅」八条口より徒歩約 14 分
- ・JR・京阪「東福寺駅」より徒歩約 7 分
- ・地下鉄「九条駅」より徒歩約 11 分
- ・駐輪場あり、駐車場なし



THEATRE E9 KYOTO

G: 京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

／伊藤記念図書館（京都市立芸術大学附属図書館）

京都市下京区下之町 57-1 京都市立芸術大学

- ・JR・近鉄・地下鉄烏丸線「京都駅」より徒歩約 6 分
- ・京阪「七条駅」より徒歩 10 分
- ・市バス 4、7、16、81、205、南 5 系統「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ
- ・駐輪場あり、駐車場なし

H: ミーティングポイント BnA Alter Museum

京都府京都市下京区天満町 267-1

Tel 075-748-1278

- ・阪急京都線「京都河原町駅」より徒歩約 6 分
- ・市バス 4、7、205 系統「河原町松原」より徒歩約 3 分
- ・市バス 3、5、46 系統「四条河原町」より徒歩約 8 分
- ・駐輪場、駐車場なし

チケット情報

2025年8月8日（金）12:00よりチケット発売開始！

アーティスト		前売券				当日券	席種
		一般	ユース*・ 学生 *25歳以下	高校生 以下	ペア (前売のみ)		
Kansai Studies [展示] おしまたくろう『ノイズ・ミュージックさがしてー超洛外での フィールドレコーディング／異世界への綻び』		入場無料					—
ターニヤ・アル＝フリー & ズィヤード・アブー・リーシュ 『電力と権力を探して』	展示	入場無料					—
	パフォーマンス	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500	前売と 同額	自由席
中間アヤカ 『Hello, I'm Your New Neighbor. / こんにちは、今日からお隣さんです。＜翔んで京都編＞』		¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500		参加料
バック・トゥ・バック・シアター 『いくつもの悪いこと』		¥4,000	¥3,000	¥1,000	¥7,500		自由席
マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター 『トゥアの片影』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
Echoes Now		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
村川拓也 舞台版『テニス』		¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由席
筒井 潤 『墓地の上演』		¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由席
荒木優光 『ノー・ボンチ（ファストリサーチスクラッピング）』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
アダム・キナー & クリストファー・ウィレス 『MANUAL』		¥3,000	¥2,500	¥1,000	—		入場券
Punk and Beyond	トーク & 上映会 (+1 drink ¥600)	¥2,500 (+1 drink ¥600)	¥2,000 (+1 drink ¥600)	¥1,000 (+1 drink ¥600)	¥4,500 (+1 drink ¥600 × 2)		自由席
	ライブパフォーマンス (+1 drink ¥600)	¥3,500 (+1 drink ¥600)	¥3,000 (+1 drink ¥600)	¥1,000 (+1 drink ¥600)	¥6,500 (+1 drink ¥600 × 2)		オールスタン ディング
倉田 翠 / akakilike 『病癒えし者の着色された魚への聖なる感謝の歌』		¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		自由席
マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス 『私はユニコーンではない』		¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500		自由席
Jang-Chi × 李 銘宸（リー・ミンチェン）× ネス・ロケ × 温 又柔 『クルージング：旅する舌たち』		¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由席
ROOMシアター京都 “いま” を考えるトーク × KYOTO EXPERIMENT Super Knowledge for the Future [SKF] プログラム『不可能の限りにおいて』リーディング公演＋トーク		¥1,500	¥1,000	¥1,000	—		自由席
Super Knowledge for the Future [SKF]		無料・予約優先 *一部有料プログラムあり SKF のプログラムはウェブサイトよりご予約ください。					—
ミーティングポイント		入場無料					—

🎫 チケット取扱

🎫 KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

オンライン | <https://www.s2.e-get.jp/kyoto-ex/pt/> (セブニーイレブン引取またはQR 発券)

電話予約 | 075-213-0820 (セブニーイレブン引取)

窓口 | 京都市中京区少将井町 229-2 第7 長谷ビル 6F

取扱時間 | 平日 11:00-19:00 (開催期間中は無休)

🎫 ロームシアター京都チケットカウンター

オンライン | <https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/> (要事前登録・無料)

電話予約 | 075-746-3201

窓口 | 京都市左京区岡崎最勝寺町 13 1F

取扱時間 | 10:00-17:00 無休 (臨時休館日等により変更の場合あり)

🎫 チケットぴあ

オンライン | <https://t.pia.jp>

※その他、各会場でもプログラムのチケット取扱いあり。(各会場で開催するプログラムのチケットのみ販売)

[京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、THEATRE E9 KYOTO、京都市左京東部いきいき市民活動センター]

フリーパス&各種割引チケット

※フリーパスおよび各種割引券は KYOTO EXPERIMENT チケットセンターでのみ取扱い／前売のみ／本人のみ有効。

🎫 フリーパス | ¥34,000

🎫 ユース *・学生フリーパス | ¥20,000

アダム・キナー & クリストファー・ウィレス『MANUAL』を除く Shows の有料公演 13 演目をご覧いただけます。(1 演目につき 1 回。Punk and Beyond は両プログラムを鑑賞いただけます。枚数限定。)

* 25 歳以下

※ユース・学生フリーパスは要証明書提示。

🎫 3 演目券 | ¥8,700

🎫 ユース *・学生 3 演目券 | ¥6,900

Shows の有料公演 14 演目の中からお好みの 3 演目を選び、全て同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

* 25 歳以下

※ユース・学生 3 演目券は要証明書提示。

🎫 Punk and Beyond セット券 | ¥5,500

Punk and Beyond 〈トーク & 上映会〉と〈ライブパフォーマンス〉両プログラムを、お得に鑑賞できるセット券です。

※チケット料金のほか、各日、入場時に 1 drink (¥600) が当日別途必要です。

🎫 パートナーホテル割

パートナーホテル利用時に配布されるクーポンを当日公演会場の受付でご提示いただくと、Shows のチケット料金が ¥500 引きにてご購入いただけます。

※チケット 1 枚につき 1 名、1 回のみ有効。 ※前売チケットには適用不可

※前売券が完売した場合は、当日券の販売がない場合があります。当日券の有無については、公演当日に公式 X アカウントでご案内します。

🎫 その他

車椅子でお越しのお客様は、各料金の ¥500 引きとなります。お席の指定をさせていただく場合がございます。車椅子または障害者手帳をお持ちのお客様の介助者は、1 名無料となります。ご予約・お問い合わせは、KYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで。

☞ KEX サポーター

寄付（個人、企業版ふるさと納税）を通して KYOTO EXPERIMENT を支援していただける会員制度「KEX サポーター」を2025 年も募集しています。

「KEX サポーター」制度は2023 年よりスタートし、これまでも多くの方からのあたたかいご支援を通して、フェスティバルの実現に向けての力となってきました。今年度からの「KEX サポーター」は、フェスティバルを共につくり、フェスティバルのミッションそのものを体現する存在のコミュニティとして発展させていきます。経済的なご支援のみにとどまらず、フェスティバルの体験を深くシェアする場づくりや、サポーターのみなさんと一緒につくる限定イベントなどの機会を設けることで、対話の場としてのフェスティバルを体現するコミュニティとして、よりフェスティバルを力づけていただきたくと共に、サポーター間の交流を生み、豊かな観客文化の醸成を目指します。

未来に向けた KYOTO EXPERIMENT のさらなる挑戦に、ぜひ KEX サポーターへのご登録とご支援を、よろしくお願いいたします！

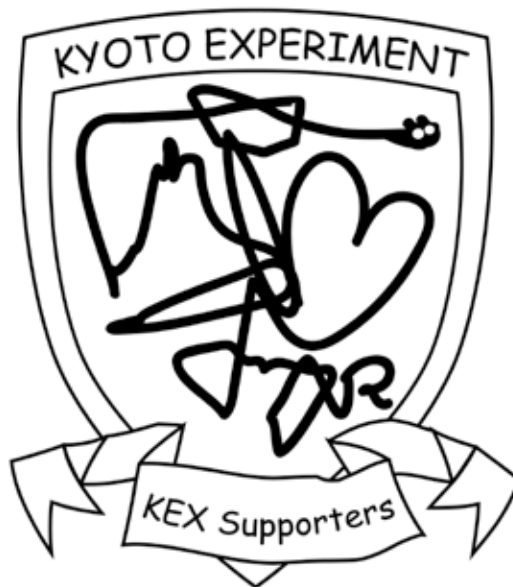
※ KEX サポーターとしてご支援いただく寄付金は、「ふるさと納税」制度の対象となり、税控除の対象となります。

サポーター募集中

☞ 単年募集：7 月 29 日（火）17:00 まで

URL ☞ <https://congrant.com/project/kyotoart/17567>

☞ 継続募集：近日中に募集予定



☞ サポーター全員にプレゼント！

- フェスティバルの裏側を発信！会員限定 Instagram アカウントへのご招待
- 会員限定！スペシャルパーティへのご招待（9 月予定）
- サポーター感想シェア忘年会
- KEX スタッフ・サポーターで共同企画イベントをする権利
街歩きツアーやフリーマーケットなど、サポーターコミュニティで楽しむイベントの企画募集をします
- KEX サポーター会員バッジ（一部の公演で優先入場できる！）
- 公演チケット先行販売のご案内（8 月上旬）
- ウェブサイト・当日パンフレットにお名前の掲載（希望者のみ）

※ 演目招待等の特典について

演目招待及びオリジナルグッズの特典は、京都市外在住の方のみお受取りいただけます。

10月

アーティスト		会場	プレ期間	4	5	6	7	8	9	10	11
				土	日	月	火	水	木	金	土
Kansai Studies おおしまたくろう		B		展示 10.4 (土) -10.26 (日) 10:00-20:00							
ターニヤ・アル＝ フリー & ズィヤード・ アブー・リーシュ	パフォーマンス	G		15:00	13:00 ♡ 18:00	14:00	13:00	13:00	13:00		
	展示										
中間アヤカ		-		15:30	11:00		15:30		14:30	16:30	11:00
バック・トゥ・バック・シアター		A		17:00	15:30 ★♡						
マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター		A		18:30	13:00 ★♡ 17:30						
Echoes Now		B					18:00 ★	18:00			
村川拓也		D							16:00	14:00 ★	14:00 18:00
筒井 潤		F							18:00	18:00	13:00
荒木優光		A								18:00 ★	16:00
アダム・キナー & クリストファー・ウィレス		G									
Punk and Beyond	トーク & 上映会	E									
	ライブパフォーマンス										
倉田 翠 / akakilike		C									
マルタ・ルイサ・エルナンデス・カデナス		B									
Jang-Chi × 李 銘宸 (リー・ミンチェン) × ネス・ロケ × 温 又柔		A									
『不可能の限りにおいて』リーディング公演＋ トーク		A									
Super Knowledge for the Future [SKF]			①								
① プレイベント KEX2025 キーワードよもやま夜話			9/18								
② 『墓地の上演』プレイベント 旧真田山陸軍墓地 見学&レクチャー			19:00	③		④	⑥		⑦		
③ ファイブ・アーツ・センターについて						11:00					
④ マーク・テ ワークショップ							18:00				
⑤ ターニヤ・アル＝フリー アーティスト・トーク			②	13:00		⑤			18:00		
⑥ バック・トゥ・バック・シアター ワークショップ						18:00					
⑦ 『仕事の時の仕事についてじゃないおしゃべり』			9/27								
⑧ ズィヤード・アブー・リーシュ トーク			13:30								
⑨ アダム・キナー&クリストファー・ウィレス アーティスト・トーク											
⑩ ラストサポート！ディレクターズ・トーク&きのこ DJ ナイト！											
⑩ 美術家 遠藤 薫 トーク 「出現型制作の方法論」											

★ポスト・パフォーマンス・トーク

♡託児サービスあり

12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	上演時間
日	月・祝	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
展示 10.4 (土) -10.26 (日) 10:00-20:00															—
															75 min
展示 10.11 (土) -11.16 (日) 10:00-18:00 休館日：10.27 (月)、11.4 (火)、11.10 (月)															—
11:00															60 min (予定)
															60 min
															75 min
															130 min (予定)
14:00 ♡	12:00														80 min (予定)
18:00	15:00														180 min
16:00 ♡															60 min (予定)
	各日 12:00-19:00														45 min
				17:00											—
						16:00	18:00								180 min
					18:30	13:30	15:00 ★♡								70 min (予定)
												16:00 ★	18:00	18:00	40 min
												19:00	15:00 ★	15:00 ♡	60 min (予定)
						16:00									180 min
									⑧ 19:30	⑨ 19:00				⑩ 12:30	—

📖 開催クレジット

主催 京都国際舞台芸術祭実行委員会

[京都市

ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）

京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

京都芸術大学 舞台芸術研究センター

THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）]

一般社団法人 KYOTO EXPERIMENT

共同主催 京都市立芸術大学

[ターニャ・アル＝フリー & ズィヤード・アブー・リーシュ、アダム・キナー & クリストファー・ウィレス]

独立行政法人国際交流基金

[マーク・テ / ファイブ・アーツ・センター、Jang-Chi × 李 銘宸（リー・ミンチェン）× ネス・ロケ × 温 又柔]

左京東部いきいき市民活動センター（指定管理者：特定非営利活動法人劇研）

[村川拓也]

助成 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（国際芸術交流））

| 独立行政法人日本芸術文化振興会

一般財団法人地域創造

公益社団法人企業メセナ協議会 社会創造アーツファンド

助成 クリエイター支援基金

（個別プログラムに対する）

公益財団法人吉野石膏美術振興財団

協賛 株式会社長谷ビル

後援 α-STATION FM-KYOTO

機材協力 株式会社流（RYU）、有限会社クワット、株式会社タケナカ

協力 BnA Alter Museum、ホテル アンテルーム 京都、河岸ホテル、THE REIGN HOTEL KYOTO、

node hotel、MAGASINN KYOTO、CLUB METRO、京都岡崎 蔦屋書店、

京都学生演劇祭 2025、豊岡演劇祭 2025、ニュー・プランシュ KYOTO in Residence、

一般社団法人 HAPS、京都市東山青少年活動センター



令和7年度（第80回）文化庁芸術祭記念公演



京都国際舞台芸術祭実行委員会

委員長	山本麻友美（京都芸術センター副館長）
副委員長	石田洋也（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事）
委員	安藤善隆（京都芸術大学 舞台芸術研究センター所長／同大学教授）
	梅山いつき（演劇研究者／近畿大学文学部芸術学科舞台芸術専攻准教授）
	小倉由佳子（ロームシアター京都 事業課長）
	小崎哲哉（ジャーナリスト／アーツ・プロデューサー）
	蔭山陽太（一般社団法人アーツシード京都理事／THEATRE E9 KYOTO 支配人）
	小山田 徹（美術家／京都市立芸術大学理事長・学長）
	牧澤 憲（京都市文化市民局 文化芸術企画課事業推進担当課長）
	松本守弘（公益財団法人京都市芸術文化協会専務理事兼事務局長）
	吉岡 洋（美学者／京都芸術大学 文明哲学研究所所長）
顧問	天野文雄（能楽研究者／大阪大学名誉教授）
	太田耕人（演劇評論家／京都教育大学学長）
	茂山あきら（狂言師／NPO 法人京都アーツミーティング理事／THEATRE E9 KYOTO 館長）
	篠原資明（京都大学名誉教授）
	千 宗室（裏千家家元）
	建島 哲（詩人／美術評論家／京都芸術センター館長）
	畑 律江（毎日新聞客員編集委員／大阪芸術大学短期大学部客員教授）
	平田オリザ（劇作家・演出家／劇団「青年団」主宰／芸術文化観光専門職大学学長／京都市特別顧問／青森県立美術館館長）

（五十音順）

京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

共同アーティスティックディレクター 川崎陽子、塚原悠也

事務局	垣脇純子（事務局長）
	川崎陽子（エグゼクティブ・ディレクター）
	和田ながら（アシスタント・ディレクター）
	豊山佳美（ディレクターチームデスク、広報）
	門脇俊輔（経理・票券）
	前田瑠佳、江口桃魚、加藤夏輝（広報）
	井上美葉子、永澤萌絵（インターン・ボランティア統括）
	渡邊裕史（フリンジ：More Experiments、ミーティングポイント）
	イフクキョウコ
	木村莉彩、杉原武尊、村側晃太郎（インターン）

制作統括	山崎佳奈子（KANKARA Inc.）
制作	柴田聡子、清水 翼（KANKARA Inc.）、陳 逸君、豊山佳美、neco、八木志菜、渡邊裕史
	〔ロームシアター京都〕垣田みずき、寺田貴美子、眞鍋隼介
	〔京都芸術センター〕黄 宇曦、谷 竜一、寺岡樹音、西田祥子、三好帆南、雪岡 純
	〔京都芸術大学 舞台芸術研究センター〕井出 亮、中間慶子
	〔THEATRE E9 KYOTO〕奥山愛菜

Kansai Studies コーディネーター	堤 拓也
海外キュレーター招聘 コーディネーター	新田幸生

テクニカル	小林勇陽（ディレクター）
	北方こだち、小島聡太、十河陽平、綿中駿介（コーディネーター）
	さかいまお（デスク）

ドキュメントコーディネーター 山口紀子

和文英訳 Art Translators Collective（水野響、森本優芽、リリアン・キャンライト）、
ウィリアム・アンドリュース、齋藤 啓

通訳 齋藤 啓、辻井美穂

アートディレクション・デザイン 小池アイ子

デザインアシスタント 田中ヴェートリ美南海、田尾さくら

ウェブディレクション・デザイン・開発 白石洋太

アドバイザーボード	大澤寅雄（合同会社文化コモンズ研究所代表）
	富樫佳織（明星大学経営学部教授）